

研 究 紀 要

第 3 0 集

茨 城 県 高 等 学 校 教 育 研 究 会 英 語 部



ごあいさつ

－研究紀要の発刊に寄せて－

茨城県高等学校教育研究会英語前部長

宮本 慎一

会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より英語部の活動にご理解、ご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございます。このたび、ここに研究紀要第30集を発行できますことをうれしく思います。

さて、あらためてこの3年間を振り返ってみますと、令和2年に始まる新型コロナウイルス感染拡大により様々な活動が制限される中、その実施にあたり様々な方法が模索されました。この期間に「止まったこと」と「進んだこと」があります。授業、研修会、コンテストなどの対面実施をはじめ留学などの異文化交流の多くが中止された一方で、一部の行事や国際交流のオンラインでの実施が試みられました。コロナ禍はデジタル機器の使用を加速させ、ICT活用に関する研究が進みました。

令和5年度に入ると新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行され、徐々に行事が対面で実施されるようになりました。人と人が対面で直接接することの素晴らしさを実感するとともに、デジタル機器の恩恵を享受しつつも、この数年間にわたるコミュニケーションの不自然さを認識しました。また近年では生成AIが世界中を巻き込みながら急速に進化しており、その英語教育における活用方法についての議論や研究・実践が盛んに行われております。今後も英語教育に新たな変化を生じさせていくことは想像に難くありません。

しかし、様々な要因で教育環境に変化が生じて、いかに教材やツールが様々な形に変化しようと、私たち英語教師の果たすべき役割は、自立した学習者を育てるために生徒に寄り添い学習を支援することではないかと考えます。そのために、茨城県高等学校教育研究会英語部が先生方の研究および自己研鑽に役立つ組織であり、未来を担う生徒の英語教育に寄与できますことを切に願います。

最後になりましたが、本紀要の編集・発行にご尽力いただきましたすべての方々に深く御礼を申し上げますとともに、会員の皆様におかれましては今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

茨城県高等学校教育研究会英語部研究紀要第30集

目次

令和4年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告	4
実践発表①	3
ALT3人体制での取り組み 茨城県立並木中等教育学校 宮本 脩平	
実践発表②	6
アウトプット活動の効果的なパフォーマンス評価及び観点別評価の探求 茨城県立竹園高等学校 園部 耀子	
講演会	8
新学習指導要領における「思考・判断・表現」の評価を考える ―スピーキング評価に焦点を当てて―	8
講師 琉球大学教育学部 准教授 深澤 真 先生	
令和5年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告	20
実践発表①	21
ライティングにおける指導と評価の一体化 茨城県立太田第一高等学校 石井 典子	
実践発表②	23
協働的な学びをするためには 明秀学園日立高校 黒田 すみれ	
実践発表③	24
協働的な学び～学びの深化を目指して～ 茨城県立多賀高等学校 佐藤 駿介	
テーマ別意見交換会の記録	26
令和6年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告	28
実践発表①	29
「発信力」を高める指導の取り組みーオンラインでの2校連携授業の実践報告ー 茨城県立IT未来高等学校 関根 貴則	
実践発表②	33
「主体的評価力を育成する英語ライティング指導の実践 ―ICTを活用した客観的評価を通して―」 茨城県立土浦第三高等学校 山本 達也	
各委員会報告	37
言語活動委員会	37
指導法委員会	39
英語ディベート委員会	44
茨城県高等学校教育研究会英語部事業報告	47
編集後記	50

令和4年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告

1 趣 旨 英語指導法に関する実践発表並びに講演をとおり英語教員の資質向上を図る

2 期 日 令和4年11月16日(水)

3 実施方法 オンライン(zoomを使用)

4 日 程	12:00 ~ 12:20	ログイン
	12:20 ~ 13:50	分科会
	14:00 ~ 14:45	全体会
	15:00 ~ 16:30	講演会

5 内 容

(1) 分科会

①「ALT3人体制での取り組み」

問題提起者 宮本 脩平 教諭(並木中学校)

②「アウトプット活動(レシテーション、グループプレゼンテーション)の
効果的なパフォーマンス評価及び観点別評価の探究」

問題提起者 園部 耀子 教諭(竹園高等学校)

(2) 全体会

①各分科会報告

②各委員会報告

(3) 講演会

演題:「新学習指導要領における「思考・判断・表現」の評価を考える」

講師 深澤 真 先生(琉球大学教育学部 准教授)

【講師略歴】

茨城県土浦市出身

中央大学 文学部文学専攻 卒業

Saint Michael's College MATESL 修了

筑波大学大学院 修士課程 教育研究科教科教育専攻 修了

茨城県立藤代紫水高校、竹園高校にのべ20年間勤務

次ページに続く

主な研究歴等

英語教育学とテスト・評価を専門とし、大学入試や classroom assessment などにも研究領域を広げている。

主な著作等

中学校英語検定教科書『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1~3』（共著）（開隆堂）、高等学校英語検定教科書『Revised ELEMENT English Communication I~III』（共著）（啓林館）
『実例でわかる英語スピーキングテスト作成ガイド』（共著）（大修館）、『実例でわかる英語テストガイド』（共著）（大修館）、『英語4技能評価の理論と実践』（共著）（大修館）等。

実践発表①

ALT 3人体制での取り組み

茨城県立並木中等教育学校

宮本 脩平

1 はじめに

本校は中高一貫の6年制学校であり、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）に認定されている。今年度からALTが3名体制となった。彼らの能力を最大限に活用し、生徒の英語力を向上させるため、普段の授業内だけでなく、授業外でも生徒と関わる実践を行った。

2 ALT との Team Teaching (TT)

① 普段の授業

3名のALTが、2学年ずつ（1・2年 / 3・4年 / 5・6年）に分かれて担当し、JTEとのTeam Teaching（以下TTとする）を展開している。

● 1年次～3年次（中学1年生～3年生）

週に1～2時間TTを実施し、さまざまなアクティビティを通して、文法項目に絞った練習を行ったり、会話練習を行ったりしている。2・3年次ではShow and Tellを1分で行う活動も行っており、ALTとのコミュニケーションを通して自分のプレゼンを完成させていく。



● 4年次～6年次（高校1年生～3年生）

後期生の授業では、ディベートやエッセイライティングの授業をALTとのTTにすることで、スピーキングやライティングのスキルを向上させるこ

とを目的としている。

本校では、後期生全員が週に1度、ディベートの授業を実施している。ディベートは、1対1で行うマイクロ・ディベートだけでなく、4対4で行うチーム・ディベートも行っている。ALTと議論を交わすことで、用意した原稿を読むだけでなく、即興で英語を話す力も養っている。



4・5年次のReading演習（新課程下では論理・表現Ⅰ・Ⅱ）でのTTでは、サイドリーダー（英語の副読本）に関するアクティビティを行っている。自宅学習として読んできた内容をペアワークやグループワークを通して学習している。

6年次の授業では、和文英訳の授業においてALTとのTTを行っている。英訳の仕方や文法・語法の解説はJTEが行い、生徒の答案について、ALTが表現の自然さを見ながら添削を行っている。

② クロス・カリキュラム

本校では、異なる2つの科目を2人以上の教員で担当する「クロス・カリキュラム」授業をイベント授業として行っている。今回は、生物の授業をすべて英語で行った。

この授業では、元産婦人科医であるALTと日本人の生物の教員で、2時間扱いの授業を行った。



ALT の指導のもと、生徒たちは細菌の遺伝子組み換え実験を行い、暗闇で細菌を光らせることに成功した。その後、実験結果を分析し、英語でディスカッションを行った。



生徒たちは ALT の話に熱心に耳を傾けるうちに、英語で考え、自然と英語を使用してディスカッションしている様子がうかがえた。

3 課外活動への参加

授業だけでなく、課外活動にも積極的に参加している3つの活動を紹介する。

①部活動

3名のALT全員が英語部の活動に参加している。英語部は前期英語部と後期英語部に分かれ、前期では英語を使って部員同士やALTとコミュニケーションをとる機会を提供し、後期では英語ディベートの上位大会出場に向けたサポートをしている。



また、英語部だけでなく、ALTの興味・関心を生

かし、それ以外の部活動にも参加している。例えば、母国の大学で演劇について学んだ経験のあるALTは、演劇部の生徒と一緒に活動し、文化祭での英語劇披露に向け、脚本と演技の指導を行っている。

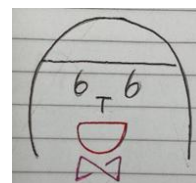
②NWC

NWCは、Namiki Weekend Writers' Clubの略で、週末に課されるエッセイ課題に対して、ALTが任意で参加した生徒のエッセイをチェックしている。金曜日にトピックが与えられ、生徒は週末にそのトピックについて書き、月曜日に提出する。

当初、6年次の受験生を対象に実施した結果、多くの生徒たちから好評を得た。今では週平均75人もの生徒がNWCに参加している。ALTが3人体制になったため、この活動を後期生の3学年に広げて実施している。

4年次生のトピックは生徒自身のことについての話題から始め、5年次になると大学入試で出題された問題にトピックを広げていく。6年次も基本的には大学入試問題が中心だが、ALTが月に一度オリジナルトピックを出題する。よりクリエイティブなトピックに挑戦し、生徒たちが純粋に書きたいという意欲を沸かせてくれる。

最も印象的なトピックの一つは、“AD6TZ9”であった。生徒たちへの指示はWrite about “AD6TZ9.” だけだった。もちろん、ALTがランダムに選んだ文字列のため、この言葉に意味はない。生徒たちは創造力を働かせ、さまざまな文章を書いた。ある生徒は、それぞれの文字を使った絵を描いたり、またある生徒は、それぞれの文字を使って文章を書こうとした。



17週にわたってエッセイを書いてきた生徒たちの作文能力は著しく向上したように感じる。

③SGS カフェ

本校では、校務分掌の中の国際教育担当部署と

して SGS(Super Global Secondary School)があり、その中の活動の一つに、SGS カフェを希望生徒向けに開催している。

SGS カフェでは、ALT がそれぞれの母国や文化について紹介している。生徒が海外になかなか行けない今、このようなイベントは生徒が日本以外の国の生活を知るきっかけになっている。

時期に合わせて、ハロウィーンやサンクスギビングなど、アメリカの秋の祝日についてプレゼンテーションを行った。



4 英語科教員校内研修

ALT が3人に増えたこともあり、JTE 自身が以前よりも英語を使うことが多く、英語力の向上に寄与している。隔週で開かれる教科会にはできる限り3人の ALT も参加し、英語で行うようにしている。

教科会では、英語科教員の指導力や英語力向上のための研修会を継続的に実施してきた。授業改善のため、定期的に授業方法や課題の出し方、また作問について話し合いを行っている。

また、プロジェクトの一環として、私たちは生徒に見せるための模擬ディバートのビデオを ALT の協力のもと撮影した。夏休みには、パーラメンタリ・ディバートを英語科教員で実施してみたりし、JTE の英語力向上だけでなく、英語科全体の一体感を高めるのにも ALT が機能してくれている。

5 課題と今後の展望

生徒たちの英語力向上を最大の目的と考えると、英語のネイティブスピーカーである ALT は重要な存在である。ALT との TT に関しては、イベント的な1～2コマ完結型の授業だけではなく、年間、もっと言えば6年間を見通した授業計画をしたい。

また、今後も授業内だけでなく、例えば学年行事に ALT が参加したりするなど、授業外でのかわりを増やしていくことで、学校の一職員としての自覚も芽生え、生徒たちにとってはより英語が身近にある環境を作り出せるかもしれない。今後も ALT と一緒に6年間の英語指導計画を作っていければと思う。

実践発表②

アウトプット活動の効果的なパフォーマンス評価
及び観点別評価の探求

茨城県立竹園高等学校
園部 耀子

1 はじめに（発表の概要）

本校では、生徒の英語力・思考力を育成するための多様なアウトプット活動の充実に取り組んでいる。アウトプット活動の中でも特に『レシテーション（暗唱）』と『プレゼンテーション』の二つを取り上げ、パフォーマンス評価におけるルーブリックの作成・活用について実践を行った。また、ルーブリックへの観点別評価の導入に関する研究も行った。

2 研究や実践の説明

①レシテーション（暗唱）

1 学年「英語コミュニケーションⅠ」

○目的：表現に用いる英語技能の強化

【知識・技能】に主にフォーカス

○方法

時間	内容
1	・目的、進め方の説明 ・ルーブリック（評価基準）の説明 ・モデルスピーチ（4種類）を聞き暗唱するものを1つ選ぶ
2	・モデルスピーチの内容・重要表現の確認
3	・ルーブリックの再確認と動画をを用いた評価のポイントの確認 ・グループ内練習と相互評価・フィードバック
4～6	・レシテーションの発表 ・相互評価

○ルーブリック

		A (4 points)	B (3 points)	C (2 points)	D (1 point)
知識・技能	Memory どのくらい覚えているか	Perfect memorization 完璧に覚えている	Good memorization ほとんど覚えている	Consistent memorization errors ところどころ覚えていない	Almost no memorization ほとんど覚えていない
	Volume 声の大きさ 声の通り	Excellent volume 声をはっきり聞き取れる	Good volume 声をほとんど聞き取れる	Low volume 声を聞き取れない所がある	Inaudible 声をほとんど聞き取れない
	Pronunciation 発音の明瞭さ	Excellent pronunciation 発音が非常に明瞭である	Good pronunciation 発音は明瞭に聞き取れる	Difficult to understand 発音にやや不明瞭な所あり	Unable to understand 全体的に発音が明瞭でない
思考・表現・態度	Delivery 伝えようとする姿勢、気持ち	Excellent connection with the audience 伝えようとする気持ちが非常に伝わる	Good connection with the audience 伝えようとする気持ちが十分に伝わる	Some connection with the audience 伝えようとする気持ちがあまり伝わる	No connection with the audience 伝えようとする気持ちがあまり伝わらない

②プレゼンテーション

1 学年「英語コミュニケーションⅠ」

○目的：トピックに関する情報や自分の意見をまとめ、英語で発信する

効果的なプレゼンテーションに必要な技能【知識・技能】＋発表内容を考え、必要な情報を判断し、英語で表現して伝える力【思考・判断・表現】の育成

○方法

時間	内容
1～4	・レッスンの内容を確認 (マッピング、クエスチョン、リテリング、サマリーライティング等)
5	・ブレインストーミング ・情報収集、原稿作成
6	・原稿・パワーポイント作成 ・練習と相互評価・フィードバック・修正
7～8	・グループプレゼンテーションの発表 ・相互評価

○ルーブリック

	Categories	A+ (3 points) Excellent	A (2 points) Very good	B (1 point) OK, satisfactory	C (0 points) Need improvement
Individual Mark	Length 【思考・判断・表現】		A lot of information and writing is creative 情報量が多く工夫されている	Minimum amount of information 最小限の情報である	Not enough information 情報が不十分である
	Voice 【知識・技能】			Audible きちんと聞こえる	Not audible よく聞こえない
	Pronunciation 【知識・技能】			Understandable 理解できる	Not understandable 内容が理解できない
	Eye Contact Body Language 【思考・判断・表現】			Frequent eye contact and adequate body	No eye contact or body language Reading draft
	Categories	A+ (3 points) Excellent	A (2 points) Very good	B (1 point) OK, satisfactory	C (0 points) Need improvement
Group Mark	Content Length (4-8 paragraphs) 【思考・判断・表現】		十分な(4～8段落)長さがあり、情報量が多い。	最小限の情報である。	情報量が少ない。不十分である。
	Expression 【思考・判断・表現】	適切な表現方法を用いて効果的に内容を伝えている。説得力がある。	適切な表現方法を用いてわかりやすく伝えている。	表現方法にやや誤りが見られるが、誤解を生じるほど大きな誤りではない。	表現方法に誤りが多く、意見が伝わらない。
	Content 【思考・判断・表現】	意見が十分な理由とともに論理的に述べられており説得力がある。	意見をはっきり述べている。理由もきちんと伝えている。	理由について不十分な点もあるが、意見を伝えることはできている。	意見が全く述べられていない。または、理由が全く述べられていない。
	Visuals 【知識・技能】		効果的に作られており、内容に興味を持たせる工夫がされている。	効果的に作られている。	最小限の情報が伝わる。

3 研究ないし実践の成果と課題

伸ばしたい力やアウトプット活動の特徴によって焦点を当てる観点を変えることで、教員・生徒ともにその活動での目標が明確に把握できるようになった。また生徒自身がルーブリックに基づいて実際に自己や他者の評価を行うことにより、評価者の視点から自分の活動を見直し改善することができた。主体性については、アウトプット活動の継続の中で見られる改善を評価した。

4 今後の研究ないし実践に向けた課題点

今後の課題としては以下の3点が挙げられる。
まず評価基準の妥当性についてだが、ループリックの基準は明確か、複数の教員が評価してもブレはないかなど、教員間における事前の情報共有と綿密な評価基準のすり合わせが必要となる。次に生徒相互評価の導入の意義についてだが、今回は自分の活動の客観視と修正のために導入したものの、生徒間の相互評価がパフォーマンス向上にどれだけ役立つかは継続的に運用して判断することが必要であると思われる。最後に Speaking on the spot の能力（瞬発的なスピーキング能力）の育成についてだが、今回取り扱ったレシテーション、プレゼンテーションは事前に準備ができる活動であり、瞬発的なスピーキング能力向上に関してはまた異なる手立てを考えなくてはならない。
以上の点を課題に、今後も研究と実践と行う。

講演会

新学習指導要領における「思考・判断・表現」の評価を考える —スピーキング評価に焦点を当てて—

講師 琉球大学教育学部 准教授

深澤 真 先生

1) テスティングの基礎

●テストの種類

- ・熟達度テスト(proficiency test)
言語における能力を測定するテスト。特定のコースやカリキュラムによらない。英検やTOEICなど。
- ・到達度テスト(achievement test)
言語の授業やコースにおいて生徒がどれくらい目標を達成したのかを測るテスト。学校のテストなど。

●直接テストと間接テスト

- ・直接テスト(direct test)
測りたい能力を直接測るテスト(例:スピーキングテスト)
- ・間接テスト(indirect test)
測りたい能力を間接的に測るテスト(例:筆記による発音テスト)

●集団基準準拠テストと目標基準準拠テスト

- ・集団基準準拠テスト
集団の中で他の受験者に比べてどこに位置しているかという情報を与えてくれるテスト(例:TOEFL、TOEIC、模試 など)
- ・目標基準準拠テスト
事前に設定した基準に到達したかという情報を与えてくれるテスト(例:定期テスト など)

●客観テストと主観テスト

- ・客観テスト
評価者による採点における判断が求められない、つまり誰が採点者でも同じ採点結果になるテスト(例:多肢選択式テスト)
- ・主観テスト
評価者の判断が求められるテスト(例:スピーキングテスト)
*評価者により、採点結果が一致しない場合がある。

●良いテストとは?

良いテストの3つの要素



- ・妥当性(validity)
教師がテストで測りたいと思う力(構成概念)が測れているか、使用目的に合っているか。
波及効果(washback)までを含む。波及効果とは、テスト学習や指導、また社会に与える影響のこと。
- ・信頼性(reliability)
テストを受けた状況や採点者、設問に関わらず、テスト結果が一貫しているか。

誤差は小さい方が望ましいが、完全になくすることはできない。どんなに精度の高いテストでも、2～3点の差は誤差で簡単に起こり、あまり意味がないことを知っておくべき。

・実用性(practicality)

確保できる時間や費用、労力の面でテストが**作成・実施・採点・解釈**しやすいか。

例1

授業では4技能の英語力を育成しているのに、定期テストにはリーディング・リスニング問題しか入っていない。

→4技能全般を測れているかは疑問で、その点での**妥当性は低い**と考えられる。

例2

スピーキングの採点を、A, B, Cの3段階評価で行った。(採点に関するその他の指示はなし。)

→人や時期によって採点が変わることがある。どのように**実施・採点**されたかによって、大きく得点が変わる場合があるため、**信頼性が低い**。

●3つの要素のバランス

妥当性・信頼性・実用性が全て高いという完璧なテストはない。3要素は、1つが高くなると、別要素が低くなるような関係にある。

[例] 定期テストに、スピーキングも追加した。

妥当性 ↑ 信頼性 ↓ 実用性 ↓

2) 新学習指導要領における授業と評価の一体化

●新高等学校学習指導要領

2020年度 小学校

(中学年) 外国語活動

(高学年) 小学校英語(外国語)の導入

2021年度 中学校

語彙・文法事項の増加、授業は英語で

2022年度 高校

コミュニケーション活動の高度化

●新学習指導要領の3つの柱

(1) 知識及び技能

4技能5領域(話すこと→「やりとり」、「発表」)

(2) 思考力・判断力・表現力

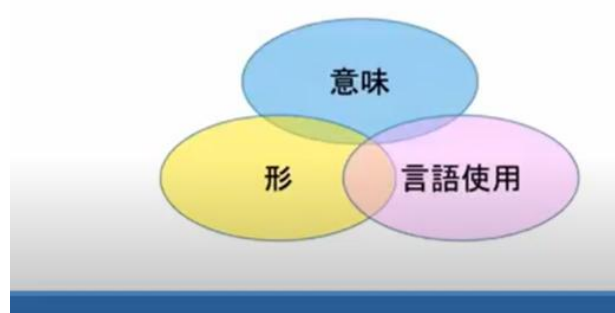
場面、状況や目的に応じたコミュニケーション

(3) 学びに向かう力、人間性等

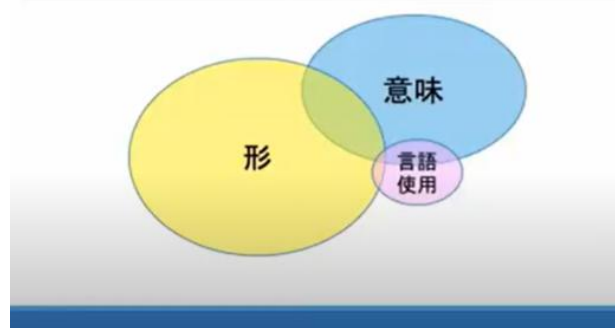
相手に対する配慮、**主体的な**コミュニケーション

●言語学習で大切な要素

言語学習で大切な要素



実際のバランスは？



学習指導要領との関係



●求められる指導：コミュニケーション活動

(Communicative Language Teaching の特徴より)

- ・ コミュニケーション活動の特徴
 - 1) 現実社会で使われている (authenticity)
 - 2) インフォメーション・ギャップがある (information gap)
 - 3) 明確な目標がある (clear objects)
 - 4) 少人数の活動である (small group activity)
 - 5) 興味深い・楽しい (interesting / fun)

教師の役割 (CLT より)

- ・ 目標は、コミュニケーション力を高めること
- ・ 文法 (form) < 意味 (meaning)、働き/使用 (function)
- ・ 教員はファシリテーター (facilitator)、生徒はコミュニケーター (communicator)
- ・ 誤り (error) は、許容する。

●「知識・技能」と「思・判・表」の評価 (中学)

知識・技能 「英語使用の適切さ」の評価

- ・ 当該学期で扱った言語材料 (特定の言語材料) を必ず使用する。*ただし、言語材料を明示することは好ましくない。
- ・ 場面や状況設定や目的が必ず必要なわけではない。*ただし、少なくとも文脈は求められてい

る。

- ・ 正確さに焦点が当てられる。

*評価対象の言語材料を評価する。

*「知識・技能」の問題の配点が高くなりすぎているかを確認。

思考・判断・表現 「適切さ」の評価

- ・ 当該学期で扱った言語材料 (特定の言語材料) を必ず使用しなければならないわけではない。
- ・ コミュニケーションを行う目的、場面、状況の設定が必ずある。*実際にありうる状況設定
- ・ 場面や目的に応じたコミュニケーションをしているかに焦点が当てられる。

●「知識・技能」と「思・判・表」の評価 (高校)

知識・技能 「正しさ」の評価

<知識>

英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。

<技能>

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的话题や社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを、論理性に注意して話して伝える技能を身につけている。

思考・判断・表現 「表現内容の適切さ」の評価

コミュニケーションを行う目的、場面、状況などに応じて、日常的话题や社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えている。

●「思考・判断・表現」のパフォーマンステストの例

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (国立教育政策研究所, 2019, p. 72) よ

り

<Directions>

- You will hear Ken's opinion about "the best destination for our school trip," and your task is to prepare your opinion against it. You may take notes on your card while you listen.
- After listening, you will have TWO minutes to prepare your opinion and ONE minute to record it.

<Ken's opinion>

I believe that we should go to Australia for our school trip because the country is very rich nature. We've been studying a lot about how to protect the environment. So it is a good idea to see how nature is kept in other countries. In Australia, they have various kinds of animals, too. They can speak English, so we can easily share different ways of thinking about the environment with them.

<配布用カード>

ID No. _____ Name _____					
【Table】 The Popular Destination for Japanese School Trips					
Rank	Place	Number of schools	Average cost (¥)	Flight time (hours)	Official Languages
1	Taiwan	182	108,876	3.5	Mandarin, English
2	Singapore	143	149,650	7.0	English, Malay, Mandarin, Tamil
3	Malaysia	135	148,007	7.5	Malay, English
4	Australia	120	203,966	9.0	English
5	Guam	99	132,519	4.0	English, Chamorro

【Your notes】 ※Prep. 2min. Rec. 1min.

Ken's idea :

↕

Your idea against it :

条件1 相手の意見の要点を述べている

条件2 相手とは反対の意見を、適切な理由とともに述べている。

評価結果	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度※
a	二つの条件を満たした上で、意見を、論理に矛盾や飛躍がなく、より適切な理由とともに述べている。	二つの条件を満たした上で、意見を、論理に矛盾や飛躍がなく、より適切な理由とともに述べようとしている。
b	二つの条件を満たしている。	二つの条件を満たそうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

※ここでは、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を、パフォーマンステストにおいて、「思考・判断・表現」と一体的に評価するという考えに基づいている。（事例5参照）

<配慮事項>

- ・音声や文法事項等が不正確だからといって、内容面を適正に評価しないことがないようにする。（「思考・判断・表現」の評価においては、言語面の正確さよりも、内容面で判断する）
- ・既習事項を用いて各条件を満たそうとしている側面を肯定的に評価する。（各単元で学習した語彙・文法を必ずしも使わなくても良い。）

●3つの柱と評価方法

知識・技能

- ・筆記テスト
- ・パフォーマンステスト など

思考・判断・表現

- ・筆記テスト
- ・パフォーマンステスト など

主体的に学習に取り組む力

- ・パフォーマンステスト（話すこと）
- ・ポートフォリオ
- ・振り返りシート など

●主体的に学習に取り組む態度の評価

1) 「思考・判断・表現」の評価と一体化させた評価

場面・目的に合ったコミュニケーション = 主体的な取り組みの結果

2) スピーキングテストなどでの評価

（声の大きさ、アイコンタクト、ジェスチャー、顔の表情など）

3) 振り返りカード（参考まで）

3) スピーキングテストの作成方法と留意点

●テスト策定の手順

(1) テスト細目(test specifications)の作成

別添 資料 テスト問題テンプレート参照。
学校の状況等に応じて、適宜変更するとよいが、知識・技能の割合が極端に多くならないように注意。

(2) テスト細目に基づき、出題箇所の決定とテストの作成

(3) 解いてみて、改善

●テスト細目活用の利点

- ・テストのバランスが良くなる
- ・テストで測ろうとする能力が明確になる
- ・テストの全体像や主旨を教員間で共有できる
- ・保護者への説明資料としても使用できる
- ・テストの比較が可能で、継続的な能力の発達を追いやすい

●スピーキングテストの作り方

(1) テストの目的と測りたい能力（構成概念）の明確化

＜テストで測りたい能力の例＞

- ・準備すれば短いスピーチができる力
- ・質問する力
- ・会話での対応力
- ・即興で話す力

*学習到達目標(CAN-DO)や学習内容と照らし合わせ、テストで測る能力を決定

(2) タスク（問題）形式を選ぶ

- 1) **モノローグ型**（スピーチ、プレゼンテーションなど）
- 2) **教師との対話型**（インタビューなど）

3) 生徒同士の対話型（ディスカッション、ディベート）

- ① 測りたい技能を測るにはどのタスク形式が良いか
- ② 授業で行った活動、または現実世界で実際に生徒が使う活動形式に近い形式は何か
- ③ 実施しやすいのはどのタスク形式かを念頭に置き、選んでいく

・対話型タスク形式の特徴

教員対生徒の対話型タスクは質問を標準化できる一方で、発話タイプが限定される
生徒対生徒の対話型タスクは生徒同士の自然な会話を引き出しやすく、教員が評価に集中できる一方で、対話者による影響が大きく、テストの標準化が難しい。

●産出型タスク形式

・制限産出型タスク

産出技能がある一側面（例：発音、文法など）に焦点を当てており、回答がある程度予想され、予想される回答が短いタスク形式とする。

- ① 現実世界で行われる産出活動とは違いが大きく、自由度が小さく、創造的な要素を作りにくい
- ② 評価が比較的しやすい
- ③ テストの信頼性・実用性が自由型産出タスクに比べて高い

・自由型産出タスク

広い産出技能を測り、言語を使用して何かを行う意味・内容を重視したタスク形式とする。多くの異なる回答の可能性がある、ある一定のまとまりのある産出を求めるものとする。

- ① 現実世界で行われるタスクに近い
- ② 測ろうとする技能を実際に行わせる直接テストなので、制限産出型タスクに比べ妥当性が高い
- ③ 評価や採点の難しさ

●スピーキングの産出型タスク例

制限	タスク形式	タスク例
強	音読	英文の音読
中	フレーズへの対応	T: Thank you. → S: Sure. / No problem.
	事実に関する短い質問	T: How is the weather today? → S: It's cloudy.
弱	話す内容を日本語で提示して、英語で話す	「一番好きなフルーツは何か」を質問しなさい。 → What fruits do you like best?
	絵の描写	絵を提示し、その絵について描写

制限	タスク形式	タスク例
なし	スピーチ、プレゼンテーション	趣味について、それに関連したものを示しながら説明。
	インタビュー	生徒に対して「自分の夢」についてインタビュー
	ロールプレイ	お小遣いを増やして欲しいに反対する親
	ディベート、ディスカッション	「日本の大学は9月から学年を始めるべきだ」

(3) 評価（採点）方法を選ぶ

- 1) 項目独立型：各設問を正解／不正解で採点する
- 2) 項目非独立型：ある程度まとまった発話を評価する方法（＊ルーブリックの活用）
 - ① 総合的評価：まとまった発話を総合的に評価
 - ② 分析的評価：発音、流暢さ、正確さなどのように評価規準（観点）ごとに評価

●ルーブリック（採点基準表）を作る

評価項目の例

- ・発音、イントネーション → 知識・技能
- ・語彙・文法的正確さ → 知識・技能
- ・適切さ（トピック的、社会的） → 思・判・表
- ・流暢さ → 主体性
- ・態度（アイコンタクト、ジェスチャー） → 主体性

●留意点

(1) テストの予告

【予告する内容】

- 1) 問題例（類似問題など）
- 2) 評価の観点、ルーブリックなど

・目標を立てる → テスト → 振り返り
のような自己調整学習につながる

(2) 負担の軽減

- ・英語科として取り組むことにより、負担を分担
- ・資料等の引き継ぎで負担軽減 & 質の向上
- ・テスト時に採点（または、録画も）
- ・評価の観点は絞る

(3) 信頼性の向上

- 1) 評価前にできること
 - ・ルーブリックの作成
 - ・判定基準サンプル作成／収集
 - ・評価者訓練
 - ① ルーブリックの説明
 - ② 評価してみる
 - ③ 評価結果の比較
 - ④ ディスカッション

2) 評価後にできること

最初や中間に採点したものを一部で良いので再評価してみる
→ 評価者内での基準が一貫していたかを確認

(4) ルーブリック作成時の注意点

- ・評価の観点および、表現を一貫させる
- ・分析的評価の場合、評価項目を多くしすぎない
- ・観察可能な具体的行動を書く

(主体性 → どのような行動が現れたら評価するか?)

- ・授業で指導したポイントと一致させる

(授業では流暢さ重視 → テストでは正確さ重視 ではNG)

4) スピーキングテストの評価をしてみよう

話すこと (ロールプレイ)

1. 測りたい力:

身近な話題(道案内)について、基本的な語句や文を用いて、情報や考えを話して伝え合うことができる力

2. CEFR-Jに基づくタスク:

CAN-DO 記述 (A2.1 の1つ目): 順序を表す表現である first, then, next などのつなぎ言葉や「右に曲がって」や「まっすぐ行って」などの基本的な表現を使って、単純な道案内をすることができる。

3. ロールプレイタスク: 道案内

設定

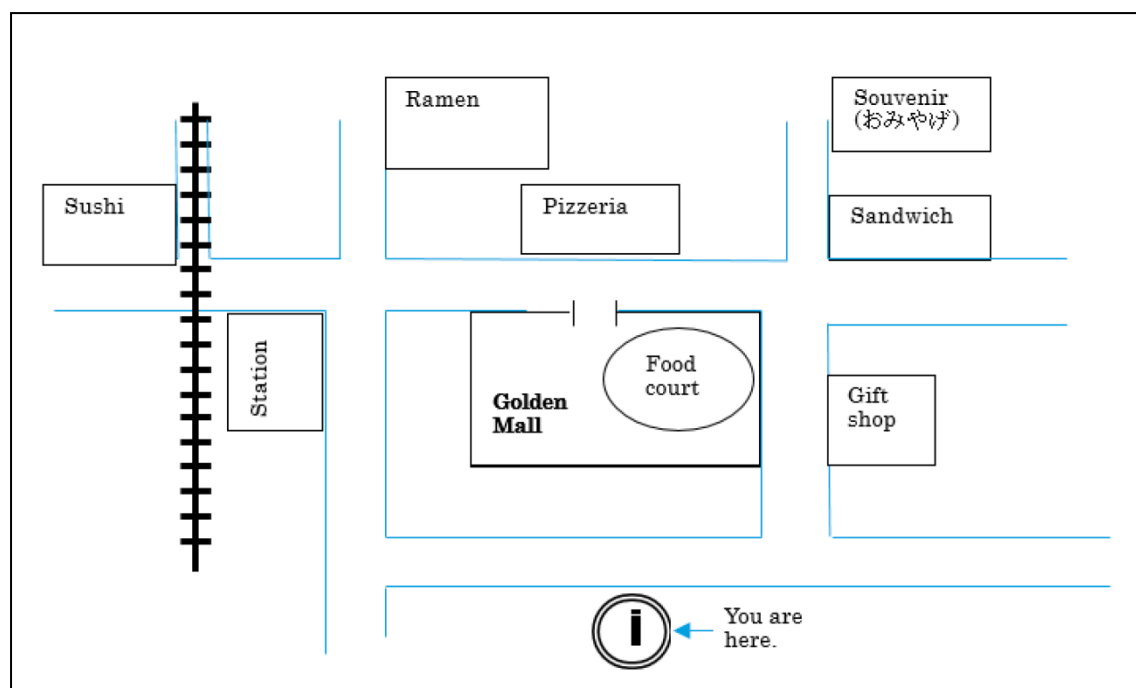
先生: 海外から来た観光客

生徒: 観光案内所のスタッフ

4. 時間設定: 事前提示なし(即興) 準備

時間 15 秒(地図の確認の時間) 話す時間 2 分

地図：



1. 評価規準：

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・質問し、情報や考え、気持ちなどを述べるために必要となる語彙や表現、音声等を理解している。 ・身近な話題（道案内）について、質問し、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合う技能を身に付けている。	相手の発言を理解しながら、身近な話題（道案内）について、質問し、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合っている。	相手の発言を理解しながら、身近な話題（道案内）について、質問し、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合おうとしている。

2. 採点の基準： 「思考・判断・表現」は以下の二つの条件に基づき、採点を行う。

（条件1）地図を見ながらであれば、聞き手は道案内が理解でき、1つ目の行き先にたどり着ける。

（条件2）地図を見ながらであれば、聞き手は道案内が理解でき、2つ目の行き先にたどり着ける。

3. ルーブリック：

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	・正しい語彙や表現を使って、話して伝えている。 ・聞き手にわかりやすい音声等で話して伝えている。	二つの条件を満たした上で、 <u>関連する情報や自分の考えを詳しく</u> 話して伝え合っている。	二つの条件を満たした上で、 <u>関連する情報や自分の考えを詳しく</u> 話して伝え合おうとしている。

b	・多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度の語彙や表現を使って、話して伝えている。 ・理解に支障のない程度の音声等で話して伝えている。	二つの条件を満たして話して伝え合っている。	二つの条件を満たして話して伝え合おうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

参考：スピーキング評価ポータルサイト

<https://sites.google.com/view/speaking-assessment/>

●新学習指導要領に基づくより良い評価のために

- 1) 測ろうとする能力を明確に（テスト細目の活用）
- 2) 思考・判断・表現の評価
 - ・「適切な内容」面からの評価になっているか
 - ・知識・技能とのバランスは取れているか
- 3) 指導と評価との一体化

参考文献

小泉利恵 編. (2022). 『実例でわかる英語スピーキングテスト作成ガイド』. 大修館書店.

小泉利恵・印南洋・深澤真. (2017). 『実例でわかる英語テスト作成ガイド』. 大修館書店.

文部科学省国立教育政策研究所 (2021). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校外国語】』

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r030820_hig_gaikokugo.pdf

テスト細目（テンプレート）

1 全体

- (1) テスト名（実施日）：
- (2) テスト使用目的：成績評価に使う。生徒の学習を促進する。
- (3) 測りたい能力：テスト範囲までの到達度
- (4) 対象者：2 学年
- (5) テスト範囲（教科書名、ページなど）：
- (6) テスト時間：50 分間
- (7) 構成と形式：以下の 3 構成と形式を参照。大問4（スピーキング問題）は実技で筆記試験とは別に実施（1 人〇分）する。



2-1 測りたい能力（3観点に焦点を当てて）

大問	測りたい能力（学習到達目標と関連づけて）
1	知識・技能： 【聞くこと】遅めではっきりと話した短い会話を聞いて、詳細を理解できる。
2	思考・判断・表現： 【聞くこと】インタビューや動画サイトなど日常的な話題について、 <u>自分の必要な情報を得るために</u> 、まとまりのある簡単な会話やスピーチを聞いて、概要や詳細を理解できる。
3	知識・技能： 【読むこと】教科書に関連した簡単な英文を読み、詳細を理解できる。 【書くこと】教科書に関連した日常的な話題について、簡単な英語で書くことができる。
4	思考・判断・表現 【読むこと】あるテーマについての英文を読み、 <u>自分の意見や考えを伝えるために</u> 、英文の概要や要点を捉えることができる。 【書くこと】 <u>学校HPのアクセス数を増やすために</u> 、学校行事について、自分の考えを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある英文を書くことができる。
* 別時間	知識・技能 【話すこと】（やり取り）：教科書に関連した日常的な話題について、簡単な質問に英語で答えることができる。 思考・判断・表現 【話すこと】（やり取り）： <u>友達の意見を踏まえた自分の考えをまとめるために</u> 、社会的な話題について、自分の意見を簡単な英語で伝え合うことができる。

注1. 青字箇所は、学習内容や学習到達目標など応じて変更する。

注2. 「話すこと」はレッスンの目標に応じて、「やり取り」、または「発表」だけ評価する場合もある。

3-1 構成と形式（3観点に焦点を当てて）

大問	評価の観点	小問（測りたい能力）	問×点 = 配点	合計
1	知識・技能	問1 聞くこと（詳細理解）	5 x 3 = 15	15
2	思考・判断・表現	問1 聞くこと（概要理解） 問2 聞くこと（詳細理解）	3 x 3 = 9 3 x 3 = 9	18*
3	知識・技能	問1 読むこと（詳細理解） 問2 書くこと（制限産出）	6 x 3 = 18 6 x 3 = 18	36*
4	思考・判断・表現	問1 読むこと（概要理解） 問2 書くこと（自由産出）	5 x 3 = 15 16 x 1 = 16	31
* 別時間	思考・判断・表現 (& 主体性)	問1 話すこと（やり取り）（制限産出） 問2 話すこと（やり取り）（自由産出）	4 x 4 = 16 1 x 17 = 17	33

【3つの観点と4技能のバランス】

観点	聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと (発表・やり取り)	合計
知・技	15	18*	18*	(16)	51(67)
思・判・表	18*	15	16	(17)	49(66)
主体	(18)	(15)	(16)	(17)	(66)
小計	33 (51)	33 (48)	34 (50)	(50)	100 (199)

注1. 知・技＝知識・技能、思・判・表＝思考・判断・表現、主体＝主体的に学習に向かう力

注2. 主に青字箇所は、学習内容やテスト範囲などに応じて変更する。ただし、4技能5領域、3つの観点のバランスを考
えて行う。また、問の数や大問の配点なども必要に応じて変更を行う。

注3. 制限産出＝産出技能のある一側面（例：発音、文法など）に焦点を当てるタスク形式。回答が予測しやすく、短いこ
とが多い。自由産出＝広い産出技能を測り、言語を使用して何かを行う意味・内容を重視したタスク形式。多くの異
なる回答の可能性があり、ある程度まとまりのある産出が求められる。

2-2 測りたい能力（4技能5領域に焦点を当てて）

大問	測りたい能力（学習到達目標と関連づけて）
1	聞くこと： 【知識・技能】 遅めではっきりと話した短い会話を聞いて、詳細を理解できる。 【思考・判断・表現】 インタビューや動画サイトなど日常的な話題について、<u>自分の必要な情報を得るために</u>、ま とまりのある簡単な会話やスピーチを聞いて、概要や詳細を理解できる。
2	読むこと： 【知識・技能】 教科書に関連した簡単な英文を読み、詳細を理解できる。 【思考・判断・表現】 あるテーマについての英文を読み、<u>自分の意見や考えを伝えるために</u>、英文の概要や要点を 捉えることができる。
3	書くこと： 【知識・技能】 教科書に関連した日常的な話題について、簡単な英語で書くことができる 【思考・判断・表現】 <u>学校H Pのアクセス数を増やすために</u>、学校行事について、自分の考えを整理し、簡単な語 句や文を用いてまとまりのある英文を書くことができる。

＊別時間	話すこと： 【知識・技能】 （やり取り）：教科書に関連した日常的な話題について、簡単な質問に英語で答えることができる。 【思考・判断・表現】 （やり取り）：<u>友達の意見を踏まえた自分の考えをまとめるために</u>、社会的な話題について、自分の意見を簡単な英語で伝え合うことができる。
------	--

注1. 青字箇所は、学習内容や学習到達目標など応じて変更する。

注2. 「話すこと」はレッスンの目標に応じて、「やり取り」、または「発表」だけ評価する場合もある。

3-2 構成と形式（4技能5領域に焦点を当てて）

大問	測りたい能力	小 問	問×点 = 配点	大問配点
1	聞くこと	問1 知識・技能（詳細理解） 問2 (1) 思・判・表（概要理解） 問2 (2) 思・判・表（詳細理解）	$5 \times 3 = 15$ $3 \times 3 = 9$ $3 \times 3 = 9$	33
2	読むこと	問1 知識・技能（詳細理解） 問2 思・判・表（概要理解）	$6 \times 3 = 18$ $3 \times 5 = 15$	33
3	書くこと	問1 知識・技能（制限産出） 問2 思・判・表（自由産出）	$6 \times 3 = 18$ $16 \times 1 = 16$	34
＊別時間	話すこと（やり取り）	問1 知識・技能（制限産出） 問2 思・判・表（自由産出）	$4 \times 4 = 16$ $1 \times 17 = 17$	33

【3つの観点と4技能のバランス】

観点	聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと （発表・やり取り）	合計
知・技	15	18*	18*	(16)	51(67)
思・判・表	18*	15	16	(17)	49(66)
主体	(18)	(15)	(16)	(17)	(66)
小計	33 (51)	33 (48)	34 (50)	(50)	100 (199)

注1. 知・技＝知識・技能、思・判・表＝思考・判断・表現、主体＝主体的に学習に向かう力

注2. 主に青字箇所は、学習内容やテスト範囲などに応じて変更する。ただし、4技能5領域、3つの観点のバランスを考えて行う。また、問の数や大問の配点などにも必要に応じて変更を行う。

注3. 制限産出＝産出技能のある一側面（例：発音、文法など）に焦点を当てるタスク形式。回答が予測しやすく、短いことが多い。自由産出＝広い産出技能を測り、言語を使用して何かを行う意味・内容を重視したタスク形式。多くの異なる回答の可能性があり、ある程度まとまりのある産出が求められる。

令和5年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告

1 趣旨 研究授業、分科会別の問題提起ならびに協議、講演会を通し英語教員の研修を行い、授業の在り方を考える。

2 期日 令和5年11月29日(水)

3 会場 茨城県立多賀高等学校 〒316-0036 茨城県日立市鮎川町3-9-1

4 日程 12:45 ～ 13:15 受付
13:30 ～ 14:20 公開授業

授業者	科目名「テーマ」	場所
坪 壮一朗 教諭	英語コミュニケーションⅠ 「ALT との効果的な TT」	本館4階 1年5組教室
会沢 清恵 教諭	英語コミュニケーションⅡ 「協働的な学び」	本館4階 2年5組教室
佐藤 駿介 教諭	英語コミュニケーションⅡ 「協働的な学び」	本館4階 2年6組教室

14:35～15:45 Try It On Monday 研修
14:40～ 実践発表

発表者（所属）	テーマ
石井 典子 教諭 （太田第一高校）	「ライティングにおける指導と評価の一体化」
黒田 すみれ 教諭 （明秀学園日立高校）	「協働的な学びをするためには」
佐藤 駿介 教諭 （多賀高校）	「協働的な学び～学びの深化を目指して～」

15:15～ テーマ別意見交換会

場所	テーマ
ブース①	ICT の活用 or パフォーマンステストの方法
ブース②	指導と評価の一体化
ブース③	協働的な学び

実践発表①

ライティングにおける指導と評価の一体化

茨城県立太田第一高等学校

石井 典子

1 指導と評価の一体化に向けた本校の取り組み

本校では3年前、当時の塚田教頭先生のお声かけで、附属中から高校までの6年間を貫くCAN-DOリストを作成しました。既に多くの学校で作成、活用されていると思いますが、指導計画や評価計画作成の際、CAN-DOをどう達成させるか、と逆算で考えられる点が便利だと思います。また、CAN-DOを意識することで「教師が何を教えるか」から「生徒が何をできるようになるか」へと、意識するポイントが変わったように感じます。

作成から3年経過し、未達成のCAN-DO項目もありますので、振り返りを教科内で共有し、指導を見直すべき時だと感じています。CAN-DO自体の見直しも、継続的な活用には必要だと捉えています。

2 指導と評価の一体化を意識した実践

① Essay Writing (テスト)、Performance Test 書く意欲・必然性を高める準備活動 (資料①)

「伝えたいこと」を内在化させるため、書く意欲・必然性を高める話す活動を事前に行っています。また「多少間違っても伝えたいことを書く」よう指導し、間違いからの学び・気づきの機会を増やしています。

Writing 解答用紙にループリック添付 (資料①)

Writing 活動の目標を具体化したループリックを解答用紙に明記しておくことで、生徒が評価を見越して書くことができ、自己評価・学びの改善にもつながります。

評価後の書き直しの実施

「学習に関する自己調整」「粘り強い取り組み」ができるよう、一度評価を受けた後、同じトピックでの書き直しの再提出を評価に加味しました。

② 小テストで

Googleフォームでの小テストの工夫 (資料②)

設定を工夫し、フォームの提出後に正解は示さず、得点と正答・誤答のみを確認できるようにします。間違った問題に100点になるまで何回も取り組めるよう設定します。生徒のCAN-DO達成が目的なので、1回のテストの点数を評価して終わるのではなく、100点を取ることが最終的な目標です。「粘り強く自らの学習を調整しようとする取り組み」を育てるツールという位置づけです。

③ 授業で

単元の最初に全てのワークシートを配布、単元目標や言語活動の予定を説明

単元を通した学習の見通しが立ち、自分のペースで事前に取り組むこともできるので、「個に応じた学び」の推奨にもつながります。

④ テストで

目標から外れない問いの設定

当たり前のことですが、学びとテストの評価項目・基準が一貫するよう、毎回確認しています。以前、付属の問題を使おうとして、狙いがずれていたことがあったので、それ以降気を付けています。

⑤ 自己評価で (今後実施したいこと)

生徒が学びのプラン設定をできるようにする

生徒がCAN-DOや評価基準をもっと意識し、自身の現状からどれだけ伸ばすのか、どのように伸ばすのかのイメージを持って学習できるようにしたい。
Googleフォームやクラッシーのアンケート機能などを使って振り返りや「R80」の実施
学びの振り返りを蓄積することで、「主体的に学習に取り組む態度」を育成したいと考えます。

資料① (健康維持の方法についてペアワーク→QRコードで英語の質問に回答→回答の集計結果を参考に、自分の健康法とクラスの他の生徒の健康法を比較して書く活動、及び書く活動に明示したループリックの例)

Collecting and Sharing Data with Google Forms for Authentic Writing

Preparation for Essay Writing

Make a pair and ask your partner the following questions.

1. What do you do to maintain your health?
2. What foods do you eat to stay healthy?
3. What foods do you avoid eating to stay healthy?
4. How many hours should you sleep to maintain your health?
5. How many hours do you usually sleep each day?
6. What is one reason you do not get enough sleep?
7. What do you do to maintain your mental health?

Essay Writing (2-1) How to maintain my health?

- Write more than 60 words.
- Use the data shared in this lesson.

() words

Rubric	A (4 points)	B (3 points)	C (2 points)	C (1 point)	Points
Contents (内容)	The essay to maintain your health <u>well</u> <u>organized</u> <u>clearly</u> .	The essay to maintain your health <u>well</u> <u>organized</u> .	The essay to maintain your health <u>well</u> <u>organized</u> <u>clearly</u> .	The essay to maintain your health <u>well</u> <u>organized</u> .	
Data (データ)	The data shared in this lesson are used <u>properly</u> .	The data shared in this lesson are used.	The data shared in this lesson are used <u>properly</u> .	The data shared in this lesson are not used.	
Grammar (文法)	There are no errors that prevent communication.	There are some errors that affect communication.	There are some errors that prevent communication.	There are many errors that prevent communication.	
Rubric	A (3 points)	B (2 points)	C (1 point)	C (0 point)	Points
Words (語数)	50 words	30 words	40 words	30 words	

Class	No.	Name	Total Points	/15

資料② (グーグルフォームを使った小テストを行う際、100点になるまで何度でも取り組めるよう工夫した設定)

Using Google Forms Quiz not Just to Assess but To Improve Students' "Can-Do"

6セクション中1個目のセクション

スクランブル構文とイディオム 第11章 ~13章 P120~133

自分の理解度を把握するために、スクランブルをみないでやること。この課題の「提出」を成績に加えます。間違えた問題の正解は見られない設定ですが、提出した後に「スコアを表示」をクリックすると点数が分かります。「スコアを表示」の下に「回答を編集」をクリックすると、何回でも「やり直し」ができます。100点になるまで頑張ろう。

プレゼンテーション

フォームと回答の表示方法を管理できます

フォームの表示

進行状況バーを表示 ☒

質問の順序をシャッフルする ☐

送信後

確認メッセージ ☒ [編集](#)

別の画面を送信するためのリンクを表示 ☐

結果の概要を表示する ☒ [変更](#)

結果の概要を回答者と共有できます。 [変更](#)

設定

合計点: 100

テストにする ☒ 人数の割り当て、報告の設定、フィードバックの自動提供が可能になります

送信後

☒ 送信後 ☐ 確認後に手動で表示する

回答のコピーを回答者に送信 ☒ [メールアドレスを収集する] がオンになります

CHROMEBOOK の設定

ロックモード ☐ 回答者は、このテストを受けている間はタブや他のアプリケーションを開けません。また、管理対象の Chromebook を使用してこのテストを受ける必要があります。 [詳細](#)

不正解だった質問 ☒ 回答者はどの問題が不正解だったかを確認できます

正解 ☐ 回答者は、成績の通知後に正解を確認できます

点数 ☒ 回答者は、総合点と各問題の得点を確認できます

全テストのデフォルト設定

デフォルトで質問に割り当てる点数: 0 点数

新しいすべての質問に割り当てる点数

回答

回答を収集、保護する方法を管理できます

メールアドレスを収集する ☐ [確認済み](#)

回答のコピーを回答者に送信 ☐ [オフ](#)

回答の編集を許可する ☒ 提出後に回答を編集することを許可します

You Can Try!

This setting allows students to work on the same quiz over and over until they get full marks.

(高教研英語部総会後の Try It On Monday 研修で共有させていただいた資料の一部です。)

実践発表②

協働的な学びをするためには

明秀学園日立高校

黒田 すみれ

1 はじめに

協働的な学びとは「ICT の新たな可能性を生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要である」と文部科学省は述べている。私は、主体的で対話的な学びとは、教員と生徒間で言葉のキャッチボールができていることであると考え。教員の投げかけに対し、生徒が間違いを恐れずに答えることができていことを想像する。また、生徒同士でわからないところを解決しようとする力も、主体的で対話的な学びに必要であると考え。

2 ICT 活用について

昭和・平成初期と比べ、授業形態が大きく変わってきたが、まだ生徒主体の授業とはいえないものが多くあると言える。現在、全クラス電子黒板を適用することで ICT 活用に努めている学校が多くある。しかし、これは問題点もある。これまで電子黒板を使うことがなかった教員が電子黒板を利用することになり、慣れない授業を実施することになった。これにより、ICT 活用かつ生徒主体で対話的な授業をすることは難しくなったように感じる。私は英語教員だが、英文法を教える授業では講義型授業になりがちだと思う。グループワークという形態は取っているものの、どうしても説明が多くなってしまい、インプットが多い授業になってしまう。

3 これからの展望と課題

先述したように、私の授業ではグループワークを行っている。グループワークを利用し、どのように行えば生徒にとって主体的で対話的な授業に

なるかを考えていきたい。私自身 ICT をまだ活用ができていない部分が多くあるため、これから活用していくことで、生徒にとって有意義な授業になるようにしていきたい。ICT の活用とグループワークが実現化すれば、「対話的で協働的な学び」に近づくのではないかと考えている。

私は日々生徒を認めることを意識し、授業を行っている。生徒を認めることで生徒自身の自信につながり、主体的な学びに繋がると考えているからである。また、生徒に黒板に答えを書いてもらっている。まだ自発的とは言えないが、黒板に書いてもらうことで、正答であったときに生徒の自信につながるのではないかと考えている。



実践発表③

協働的な学び～学びの深化を目指して～

茨城県立多賀高等学校

佐藤 駿介

1 はじめに

本校には素直で真面目な生徒が多く、宿題も確実に提出し、部活動に熱心に取り組む。その一方で、生徒の間には学力や英語学習に対するモチベーションに大きな差があり、受動的な生徒も多い。私は授業で育てたい生徒像として、①自分の課題を理解し、その解決に向けて学び続ける生徒、②自分の役割を理解し、他者と協力して物事に取り組む生徒の二点を考えている。本発表では、協働的な学びを促す授業実践を紹介する。

2 授業の流れ

第1時では、単元の導入の後、語句・本文の音読、英文和訳、内容理解問題へと進み、主に日本語を使って内容理解をする。第2時では、本文の音読の後、内容理解問題、パフォーマンス課題、文法へと進み、主に英語を使って理解を促す。



3 授業実践① グループの中で役割を与える

第1時の英文和訳の場面では、ジグソー法と呼ばれる学習方法を取り入れている。生徒は3～4人のグループに分かれ、それぞれの生徒が準備された4つの問題から1問選ぶ。その後個人作業、同じ問題を解いた生徒同士の確認作業と進み、最

後にはグループに戻ってお互いの答えを共有する。

この学習方法の利点は、生徒が難易度に関係なく取り組むことである。以前は比較的易しい問題に対しても、諦めてしまう生徒がいたが、現在は解答する問題を絞り、確認作業やグループでの共有と段階を踏むことで、それぞれの生徒が自分の役割を果たそうと、問題の難易度に関わらず、課題に取り組むことができています。一方でこの学習方法の欠点は、オンラインの翻訳機能や、友人が考えた答えの丸写しに終わってしまう可能性があることである。

生徒にこの学習方法の感想を聞いたところ、友人と答え合わせをすることで間違いが分かり、自分の和訳を加筆訂正した後に班の人たちにアウトプットすることで、記憶に残りやすいといった肯定的な意見があった。一方で、和訳するときには何も考えずに翻訳機能の和訳を書き写して終わる人もいるため、タブレットなどの使い方を注意喚起した方が良いという否定的な意見も聞かれた。

この方法を取り入れて以来、授業では自力で問題を解く生徒や、辞書で単語を調べながら取り組む生徒が大多数で、メリットの方が大きいと考えている。言語習得には脳に適度な負荷をかけることが効果的であり、翻訳アプリなどに頼ってしまう生徒に対しては、単語や文法の知識を用いて和訳を導くこと、復習をするときには他の問題も自分で解けるか確認するように伝えている。



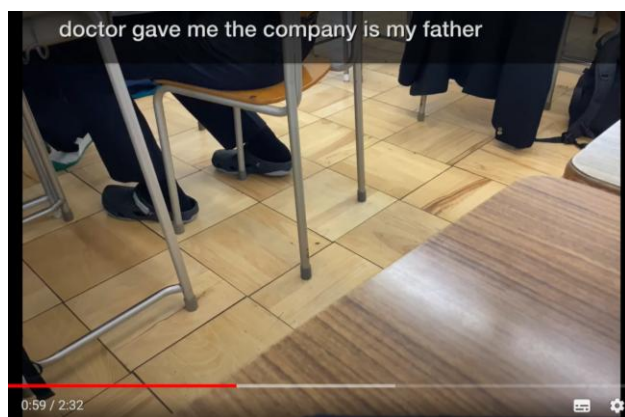
4 授業実践② Clipsを活用した読む力の確認

ClipsはiPadやiPhoneに無料でインストール

できるアプリケーションで、音声で文字起こししてくれる機能がある。授業ではペアで音読する側と、録音する側に分かれて使用している。発音がモデルの音声とかけ離れていたり、曖昧であったりすると、文字起こしができないため、生徒は自分の発音を意識して音読するようになる。課題はマイクが音を拾えないといった機材トラブルや、操作に不慣れな生徒もいることだ。生徒からも自分の発音の間違いに気付くといったメリットの一方で、授業での取り組みだけでは発音の改善につながらないといった意見も聞かれた。

今後、より効果的にこのアプリを使用するためには、録音された生徒の音声にフィードバックを返すなど、指導過程の工夫が必要であると考えている。

み、本校でも1人1台の端末を持つことが自然な光景となった。学習端末を活用した個別最適な学び、創造性を育む学びを実現するためにも、今後も授業改善に取り組んでいく。



5 今後の展望

現在、生徒の主体的な学びを目指して Clips のほか、Google Classroom や Kahoot! などを使用している。ここ数年で学校では ICT 環境の整備が進

テーマ別意見交換会の記録

① ICT の活用 or パフォーマンステストの方法

「ICT の活用」

- ・ロイロノートを使っている学校もあれば、google サービスのみをフル活用している学校もある。

[ロイロノートに関して]

メリット1：ワードやドキュメントだとスペルミス进行正しく変換してしまうが、ロイロノートはスペルミスしたままなので、正しいスペルが分かっているかどうか確認しやすい。

メリット2：誰が提出したか表示される場所。その場で書かせるので取りこぼしがなく、その場で添削して返却できる。

- ・ICT のデメリットとして、授業でタブレットに書かせているが、テストは紙ベースであることや、タブレットにタイプして入力する時と書く時では脳の使い方が異なるのではないかとある点がある。
- ・高校1年生だとタブレットが使えるのが秋頃からのので、それまでスマホを使用しているとタブレットを持ってこない。
- ・紙とタブレットのどちらからでも提出を可とすると紙で出す生徒が多い。
- ・教育困難校では、生徒がタブレットを使いこなせていない。また、テスト勉強にツールとして生かしていない。
- ・教員間でもタブレットの使い方、授業の進め方がバラバラなので難しい。
同じ学年の英語科教員で、生徒が同じような授業を受けられるようにするのが大事。
- ・タブレットを使用するのではなく、タブレットで指導する。

「パフォーマンステストの方法」

- ・プレゼンテーションを1時間で練習から本番まで行い、グループで録画し、それを提出させて評価する。
- ・リーディング課題（いくつかの英文）をもとに、好きな英文を選び、「その内容について」と「なぜそれを選んだのか」についてペアでやりとりし、質疑応答も入れ2分で行う
- ・教科書のアクティブ・ライティングを活用し、ペアでやりとりをし、その内容を書かせて提出。
- ・ALT が月に1、2回の場合には、グループ毎に「自分たちが好きなもの」について ALT に教える。評価は ALT と JTE の2人で行う。
- ・学期毎に一回、または単元毎に一回行うことが多い。
- ・ALT の助けが必要：担当者が複数いると評価者間の一貫性が損なわれるため、評価の平等性を考えると同じ人がやった方がよいと考えられる。



主に観点別評価について話し合いました。

- ・評価の方法 ・どこに重点を置くか ・テスト作成時、何に留意するべきか
- ・テスト以外で、どこで評価をするか、またその配点をどうするか
- ・教科内で共通理解を図り、一貫した評価をする必要がある
- ・差が出にくい評価方法となってしまう
- ・評定平均が高くなってしまふことのデメリット（進路）
- ・学校によっては、AばかりBばかりとなってしまう



③「協働的な学び」

協働的な学びに関する実践発表の後、各校での実践例の報告を交えて意見交換を行った。協働的な学びに対しての評価に難しさを感じている教員が多かった。新課程の評価基準において、三観点の中では「主体的に学習に取り組む態度」に当たるのではないかという意見や、評価とは自己評価／教員による評価のどちらを指すのかというような疑問も上がった。「主体的」という言葉の定義について不明確であり、各校の基準で評価につなげているという現状も報告された。

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（文部科学省、2021年）には、「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価について詳しい記述がある。本分科会では、それらを踏まえ協働的な学びはそれ自体を評価の対象とするものではないという結論に至った。

協働的な学びは、茨城県内でも各校で学級や学年において広く実践されている。協働学習では学習の初期段階におけるインプット型学習も、解のない問いに対するアウトプット型学習のような発展的学習においても活用することができる。全国的には、リテラチャーサークル、ハウス制、イエナプラン等、学年を超えた協働学習の実践例もあり、参考にしていきたい。



令和 6 年度茨城県高等学校教育研究会英語部研究協議会報告

- 1 趣旨 英語指導法について他校教員と情報を交換し、授業のあり方を考える。
- 2 主催 茨城県高等学校教育研究会英語部
- 3 会場 茨城県立 IT 未来高等学校 〒309-1738 茨城県笠間市大田町 3 5 2-1 5
- 4 期日 令和 6 年 1 0 月 3 0 日 (水)
- 5 日程

1 3 : 0 0 ~ 1 3 : 2 0	受付
1 3 : 3 0 ~ 1 4 : 2 0	授業参観
1 4 : 2 0 ~ 1 4 : 5 0	休憩・IT 未来高校見学会
1 4 : 5 0 ~ 1 5 : 5 0	研究協議会
1 5 : 5 0 ~ 1 6 : 0 0	諸連絡
- 5 内容
 - (1) 授業者
関根 貴則 教諭 [英語コミュニケーションⅠ]
人見 広章 教諭 [英語コミュニケーションⅡ]
 - (2) 授業概要
IT 未来高校と笠間高校をオンラインで繋ぎ、ブレイクアウト形式で生徒たちが発表しあい、発信力を高める、ICT による遠隔同時展開授業の取り組み。
 - (3) 研究協議
 - ①発信力を高める活動について
 - ②アンケートにより決定

実践発表①

「発信力」を高める指導の取り組み—オンラインでの2校連携授業の実践報告—

茨城県立 IT 未来高等学校

関根 貴則

1. はじめに

本報告では、例年開催されている高教研英語部地区別研究協議会（令和6年度：水戸・県東地区担当）での実践報告を、その方法や結果を中心に記載する。昨今、中央教育審議会でも議論がなされているとおり、グローバル化に対応する中で、英語によるコミュニケーション能力は今まで以上に必要とされている。そこで、「対外発信力」の指導についてさらに深く考えていく必要があり、今回の研究授業での成果を基に、その輪が広がるスタートアップになればと考えている。

2. 本校生の実態と活動のねらい

2.1 本校生について（アンケート調査）

茨城県立 IT 未来高等学校（以下、本校）は、昼間2部制（定時制）IT科の開校2年目の学校である。1年次は64名、2年次は54名の各年次2クラスの小規模校である。今回の研究授業は1年次の「英語コミュニケーションⅠ」で実施したものである。

報告者は今年度の授業内にて、授業進行のヒントとすることを目的としたアンケートを実施した。アンケートは計6問で、リッカート法（5件法）を用いて調査した。生徒は、高校入学前までの英語活動に関して、4技能5領域の5項目についてそれぞれ（1）得意だった順、（2）好きだった順に並び替えるアンケート（Google forms）に回答した。（1位：5点～5位：1点）。

	高校入学前	
	得意だった	好きだった
	$M(SD)$	$M(SD)$
読むこと	3.38 (1.34)	3.55(1.41)
聞くこと	3.53 (1.35)	3.60(1.35)
書くこと	2.49 (1.27)	3.14(1.28)
話すこと (発表)	2.40(0.88)	2.72(1.17)
離すこと (やりとり)	2.17(1.22)	2.38(1.11)

表1：英語に関する事前アンケート (Max:5, Min:1)

2.2 本授業へのきっかけとねらい

上記のアンケート結果からも分かるように、生徒の「話すこと」へのネガティブな感情は比較的大きい。しかし各パートのまとめとしてスピーキング活動を実施している中で、スピーキングに対して前向きに取り組むことができる生徒が非常に多い。そこでクラスメイトではなく、初めて会う人に対して発表するという心理的負荷を高めることで「発信力を高める」活動にしたいと思い、同じ市内にある茨城県立笠間高等学校（以下、笠間高校）メディア芸術科1年の生徒達とオンラインで交流という形をとった。また、「学校紹介」というテーマについて、それぞれの学校はIT分野、芸術分野ということで、大きな特色をもった学校だからこそできることから設定した。自分たちは知っているけれども、その内容を「知らない人」に時間内に紹介するという活動を通して、情報伝達をよりシャープに、正確にプレゼンするスキルも身につけてほしかったという狙いがある。

3. 実践内容（学校紹介プレゼン）

3.1 方法

3.1.1 学習者

本校IT科1年次生（34名）と、笠間高校メディア芸術科1年生（25名）が本授業に参加した。

3.1.2 事前準備（マテリアル）と留意点

生徒達は、それぞれ、自分の学校生活（学習内容、施設設備など）について、プレゼンテーション（Google Slide, Canva）を準備した。発表に当たり、両校で統一してワークシート（【付録】参照）を原稿用として使用した。

オンライン授業を実施するに当たって、以下の点に留意した。

（1）各グループ1人ずつがタイムテーブルに沿って一斉にタブレットを通して発表する中で、声が通りにくいことがないように、通常教室よりも広い教室でグループ間の物理的位置を離しておくこと。

（2）同一教室内で同じGoogle Meetのリンクを共有することで音声のハウリングや遅延といった問題が生じるのを防ぐために、複数のGoogle Meetのリンクを事前に作成した（e.g., 1回目のターンではIT未来グループ1と笠間グループ1がリンク①で交流し、2回目のターンではIT未来グループ2と笠間グループ1がリンク①を利用する）。

（3）画面（マイク）に向かって原稿を見ずに正対し、アイコンタクトやジェスチャーをしっかりとるよう、最初から「暗誦」を前提とした指導をした。

3.2 本時までの流れ

本授業は、「英語コミュニケーションⅠ」の授業内で実施された。本時に入る前に、各校、事前準備として数時間を準備時間として充てた。以下は本校の例である。

	準備、内容等
1	原稿・スライド作成①
2	原稿・スライド作成② (提出・ネイティブチェック)
3	原稿・スライド修正、発表練習①
4	原稿・スライド修正、発表練習②
5	校内発表会
6	本時(オンライン発表会)

発表練習では、自分の発表する様子をタブレット端末で何度も撮影し、その日の中で「一番いい動画」をクラスルームへ提出させ、教員、生徒がそれぞれ確認、評価をした。

3.3 本時の流れ

本時の50分の流れは以下の通りである。

展開(場面)	内 容
①2 min. [Introduction]	・各高校からの挨拶と紹介(TI:IT未来)
②10 min. [Kahoot!]	・プレゼン前のWarming Up活動と兼ねて、会話表現の復習
③30 min. [Presentations]	・個人プレゼンテーション(IT未来→笠間、笠間→IT未来)
④3 min. [Reflection]	・今日の振り返り(TI:笠間)

笠間高校とGoogle Meetでオンライン接続しながら、授業全体の説明、スライド送り、タイムキーパーは本校の教員（報告者）が主導で行った。

ウォーミングアップ活動として、2校間で、メイン活動内で使用する会話表現クイズ（e.g., “How do we say “いいね！” in English?”

“Arrange the words “ご清聴ありがとうございます” in English?”）をオンライン学習アプリのKahoot!で実施した。その後、各グループ間で、個人プレゼンテーション（一人あたり30秒）

とそれに対する質問など交流の時間（30秒）を1ターンとしたグループ間交流（5分）を計6ターン行った。原稿を見ずに暗誦し、自身のタブレット端末をスライドとして画面に向け、操作しながら発表を行った。30秒の交流の時間では、生徒は、本番までに練習した英語での質問やリアクションの仕方を基に英語で自由に交流した。その後、それぞれリフレクションワークシートに自己評価を記入した。

3.4 実践の結果

オンライン授業については3.1.2節で述べたことを留意したことで、特にオンライン環境等の問題は発生せず実施することができた。「初めて会う」人に学校紹介をする活動をしていく中で生徒からは「原稿がないことでアイコンタクトを特に意識することができた」「相手に自分のことを『伝える』ことを経験できた」「初めて話す人とも英語で質問やリアクションができた」など、原稿を暗誦すること以上の成果があったと感じられる。また、生徒の感想の中にはオンラインのシステム上の問題点や反省などは特になかったが、自身の発表についてさらに精度を高めたかったというコメントが多かった。

4. 経過報告と課題点

今回は「学校紹介プレゼン」という形で2校連携授業を行ったが、準備、実施段階において、(1) 1つの教室内で複数の発表者がスムーズにオンラインで発表することができる環境（広く、電波が混み合わないような部屋）の準備、(2) 事前に生徒達にターン移動の方法（リンクの切り替えなど）を熟知させておくこと、などを徹底しておく必要があると感じた。今後の展望として、こういった学校間のつながりから、2校で協力してディベートやディスカッションなどのやりとり活動に発展できるよう協力していくことができればさらに発信力を高める1歩になるのではと期待

している。

5. おわりに（報告者より）

本報告では、「発信力を高める」2校連携のオンライン授業の実践について紹介した。ICTを活用すれば、世界の裏側の人ともリアルタイムで繋がるができるようになり、メリットも増えた一方、教員として授業を運営する以上、ある程度まで深くICTについて理解しておく必要がある。とにかく業務に追われる忙しい先生たちであれば、その時間をとることも難しいことは諒解している。私が教員として採用された年はコロナ禍の始まりで、「オンライン授業」「オンデマンド授業」を余儀なくされたという苦い思い出がある。当時ある先輩教員から言われた言葉で印象に残っている「ICTはいつも（I）ちょっと（C）トラブル（T）だからどれだけ準備しても準備し足りないことはない」という何気ないボケのようでのを射ている言葉である。今回の授業においても、笠間高校の人見広章先生をはじめ、運営にご協力いただいた先生方の綿密な準備のおかげもあり、大きなトラブル無く終えることができた。また、両校の生徒たちも発表会のために準備からしっかりと努力して当日を迎えてくれたと思う。この場を借りて深い感謝を表したい。言語を扱う英語の授業だからこそできる言語活動の広がりが、こうしたオンライン連携などをきっかけに今後広まっていくこと期待したい。

【参考】

実践後に生徒にリッカート法と自由記述で事後アンケートを実施した。内容は、本時の前に行った質問項目について、高校入学後の自身の英語に関して4技能5領域の中での好みや得意不得意についてである。以下はその結果である。今回は高校入学前後における詳細な比較分析を実施していないが、参考にされたい。

	高校入学前		高校入学後	
	得意だった	好きだった	得意だった	好きだった
	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>
	(<i>SD</i>)	(<i>SD</i>)	(<i>SD</i>)	(<i>SD</i>)
読むこと	3.38 (1.34)	3.55 (1.41)	3.77 (1.33)	3.91 (1.16)
聞くこと	3.53 (1.35)	3.60 (1.35)	3.36 (1.31)	3.74 (1.09)
書くこと	2.49 (1.27)	3.14 (1.28)	3.06 (1.17)	2.89 (1.32)
話すこと (発表)	2.40 (0.88)	2.72 (1.17)	2.45 (1.06)	2.43 (1.14)
話すこと (やりとり)	2.17 (1.22)	2.38 (1.11)	2.43 (1.26)	2.43 (1.38)

【付録】

Worksheet for the presentation

~~~ My school life ~~~ Name \_\_\_\_\_

(Goal)

● Talk about your school life online!

(Useful expressions)

I will tell you about my school life.  
I study ~, I belong to ~, I like ~, This is a picture of ~  
This is my favorite ~  
Thank you for listening~



(Write your draft)

(Useful expressions for comments)

|                    |         |                |            |
|--------------------|---------|----------------|------------|
| that's good        | いいね!    | What is ~?     | ～はなんですか?   |
| sounds interesting | おもしろそう! | Do you know ~? | ～を知っていますか? |
| I like it          | 私それ好き!  |                |            |

(Reflection)

Comments good points / bad points

## 実践発表②

「主体的評価力を育成する英語ライティング指導の実践 —ICT を活用した客観的評価を通して—」

茨城県立土浦第三高等学校

山本 達也

### 1. はじめに

従来の日本の英語教育においては、指導と評価が独立した関係にあり、評価が学習改善や指導改善に効果的に活用されてこなかった課題がある。このような背景から、近年「指導と評価の一体化」の重要性が強調されるようになった。この「指導と評価の一体化」とは、評価を単に学習の結果を測定するものではなく、学習過程の一部として捉え、指導の改善と生徒の学習改善に生かすことを意味する。また、新学習指導要領では「学校で学んだことを社会に活かす」「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動する」力、すなわち「生きる力」の育成が目指されている。

しかし、単に指導と評価を一体化するだけでは、真の意味で生徒の自律的学習能力や「生きる力」を育成するには不十分である。特に英語ライティング指導においては、生徒が評価基準を意識し、自ら作成した文章を客観的に評価・修正できる力を育成することが不可欠である。

本研究では、生徒自身が評価基準を考え、それに基づいて自らの英作文を改善していく力を育成するための指導法を開発・実践し、その効果を検証する。

### 2. 研究の狙い

教員がしかけをつくらなくても生徒自身が改善していく、指導と評価の一体化を目指す方法を考えていく。本研究では、生徒の表現力を伸ばすための取り組みとして、生徒自身が修正する力を

伸ばすライティング指導の有効性を検討する。また、生きる力に結び付く生徒自身が考え、行動する力を育成する方法を検討する。

### 3. 実践内容

#### 3.1 対象と期間

- 対象：高校1年生（3クラス、計120名）
- 英語レベル：入学時点で英検3級～準2級程度
- 期間：2023年5月～2025年3月（約2年間）

#### 3.2.1 実践①帯活動：和文英訳&評価基準問題 実施頻度：

当初（2023年5月～6月）：週3回の英語コミュニケーションⅠの授業のうち、毎回最初の10分間

2023年7月以降：週1回ウォーミングアップとして実施

活動内容：

授業の冒頭10分間に、Google Formsを活用した帯活動を実施した。この活動は以下の3段階で構成される。

- 和文英訳問題（2問）：当該単元で学習した文法項目を活用する和文英訳問題
- 評価基準問題（1問）：和文英訳の問題と点数付きの回答例を複数提示し、「この問題はどのような基準で採点されているか」を考えさせる問題

#### 採点基準問題例

土浦は私が生まれた街です。（5点問題）

解答1：5点 Tsuchiura is the city in which I was born.

解答2：5点 Tsuchiura is the city which I was born in.

解答3：3点 Tsuchiura is the city which I was born.

### 3. 協働的検討：考案した評価基準について ペアで意見交換を行い、最後に全体で共有・討論

#### 実践①結果

English Level Test (桐原書店、以下 ELT) と 1 学年ベネッセ総合学力診断テスト 7 月記述 (以下進研模試) により、評価を行った。ELT において、スコア (+2.4 ポイント)・英検 2 級相当数 (+3 名)・英検準 2 級相当数 (+9 名) において伸びていた。また進研模試の表現力 A 問題 (和文英訳) において、過去 5 年間校内平均得点が全国平均を上回ったことはないが、今回の校内・全国平均の差は A の問題が同等 (±0)、I の問題が +1.4 と校内平均が全国平均を上回る結果となった。

このことから 2 か月の実践にもかかわらず、生徒は評価基準を意識しながら英作文問題に取り組む姿勢や方法を身に付けることができるようになったと考えられる。しかし、生徒から「評価基準を意識するようになり、以前よりも文法ミスは減った気がするが、そもそも知らない文法や語彙だと英作文が向上したかわからない」という声も多数聞こえた。実際の英作文の場面では、評価基準を理解していても、語彙力や文法力が十分でない場合、自ら良い英文を生み出すことは難しいという課題が浮かび上がった。

#### 3.2.2 実践②定期考査：難問英文のインプット

実践①によって、生徒は評価基準を意識しながら英作文問題に取り組む姿勢や方法を身に付けることができるようになった。しかし実際の英作文の場面では、評価基準を理解していても、語彙力や文法力が十分でない場合、自ら良い英文を生み出すことは難しいという課題が浮かび上がった。英作文力の向上には、発信活動 (アウトプット) だけでなく、インプットとしての英語表現の習得が不可欠である。

そこで、実践②では定期考査ごとに「ドラゴン・イングリッシュ基本英文 100」(竹岡広信、講談社)

から 20 文を範囲として指定し、生徒に覚えることを求めた。これらの英文は一文が比較的長く、構文や語彙も難易度が高いが、日本人学習者が英作文の基礎として習得すべき重要例文である。これらの英文については授業内での直接的な指導を行わず、自主学習とした。定期考査ではこれら基本英文に関連した設問の平均得点が非常に高く、多くの生徒が基本英文を正確に再現できていた。

難問英文例 (ドラゴン・イングリッシュ基本英文 100)  
日本人は、エレベーターや信号を待っているとき、わずか 30 秒も経たないうちにいらいらし始める。

When waiting for the elevator to come or the traffic light to change, most Japanese people become irritated within only thirty seconds.

## 4. 結果分析

### 4.1 客観的評価データによる効果測定

実践の効果を客観的に測定するために、English Level Test (ELT) を複数回実施し、1 年次から 2 年次にかけての変化を追跡した。以下の表に主要測定項目の変化を示す。

| 項目         | 1年次5月 | 1年次7月 | 1年次3月 | 2年次12月 | 2年次3月 | 変化率    |
|------------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|
| ELTスコア     | 61.7  | 64.1  | 67.5  | 78.3   | 95.2  | +54.3% |
| TOEIC予想スコア | 347   | 359.5 | 381.6 | 446.3  | 546.3 | +57.4% |
| 文法レベル      | 3.6   | 3.6   | 3.6   | 4.8    | 4.9   | +36.1% |
| 語彙レベル      | 3     | 3     | 3.3   | 3.4    | 4.8   | +60%   |
| 英検準1級      | 0     | 0     | 1     | 4      | 5     | +5名    |
| 英検2級       | 1     | 4     | 7     | 7      | 20    | +19名   |
| CEFR B2    | 0     | 0     | 1     | 4      | 5     | +5名    |
| CEFR B1    | 15    | 12    | 25    | 35     | 37    | +22名   |

ELT において、すべての項目において顕著な向上が見られた。特に 1 年次と 2 年次を比較すると文法レベルおよび語彙レベルにおける伸びも確認でき、生徒の英語力全般に向上していることが確認できた。語彙レベルの向上がなかなか見られなかったが、2 年次 3 月になり、大幅な向上が見られた。また英検準 1 級相当数および CEFR B2 レベルに関しては 0 名というスタートであったが、どちらも +5 名と上位層の生徒の向上も見られて

いる。

#### 4.2 アンケート調査から見られた変容

生徒に事後アンケート調査を行ったところ、評価基準問題に関して「何を答えるべきか考えるようになった」、「問題の意図を考えるようになった」などの回答があり、「ただ問題を解く」意識から「思考する」意識に変化したことがわかる。習っていないことでも既習事項から思考して解答したり、自ら未学習内容を学んだりする姿勢も見られた。このことから自分に必要なことを考えて学ぶ姿勢に変容したと言える。また難問英文のインプットに関しては、「長い英文を覚えておくことで、英作文を書く際に使いたい表現がすぐに出てくるようになった」「難しい構文も丸ごと覚えることで、文法的なミスが減少した」といったポジティブな反応が多数見られた。「勉強すれば、考査の問題も解けることが明らかなので、自分で勉強するモチベーションにもなった」という声も聞かれた。

### 5. 考察

#### 5.1 評価基準の意識化と英語力向上の関連

実践①によって、生徒は単に英文を書くだけでなく、客観的に評価する視点を獲得したと考えられる。「ただ問題を解く」意識から「思考する」意識へと変容している。これは英語力向上の基盤となり、特に文法的正確さの向上に貢献したと考えられる。

しかし、実践初期に出てきた「知らない文法や語彙だと英作文が向上したかわからない」という課題は、評価基準を意識するだけでは不十分であり、表現するための言語材料の習得も必要であることを示している。

#### 5.2 インプット活動と評価基準の意識化の相乗効果

実践②の難問英文のインプット活動は、実践①

で明らかになった言語材料の課題を解決する役割を果たした。生徒の感想にある「長い英文を覚えておくことで、英作文を書く際に使いたい表現がすぐに出てくるようになった」という効果は、英語表現をインプットすることの重要性を裏付けている。

評価基準の理解（何を指すべきか）と言語材料の習得（どう表現するか）の相乗効果が、英語力の総合的な向上につながったと考えられる。

#### 5.3 「生きる力」の育成

本研究の重要な成果は、生徒の学習態度の変容である。「習っていないことでも既習事項から思考して解答する」「自ら未学習内容を調べて学ぶ」といった姿勢は、新学習指導要領が目指す「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動する」力、すなわち「生きる力」の育成につながっていると考えられる。

特に、評価基準を考えさせる活動は、自らの学習を客観的に捉え、調整する能力の向上に寄与したと考えられる。

### 6. 成果と今後の課題

#### 6.1 研究成果のまとめ

本研究の2年間の実践を通して、以下の点が明らかになった：

- ・評価基準を生徒自身に考えさせる活動は、英語ライティング力の向上に効果がある
- ・難度の高い英文のインプット活動と組み合わせることで、相乗効果が生まれる
- ・これらの指導は、生徒の自律的学習態度や「自ら考え、行動する力」の育成に寄与する

特に、ELTの各項目における継続的な向上という結果は、本実践の有効性を示す客観的指標となった。また、生徒の学習態度の変容は、「生きる力」の育成という観点からも重要な成果と言える。

#### 6.2 今後の課題

## 令和6年度研究協議会報告

今後の課題として、「生きる力」の測定方法が挙げられる。生徒の「自ら考え、行動する力」を測定するための、より客観的かつ体系的な指標の開発が必要であると考えられる。また、本研究はライティングに焦点を当てたが、他の技能への応用可能性についても検討する価値がある。今後、実践と研究を重ね、より効果的な英語教育の在り方を探究していきたい。

## 7. 参考文献

新津若生（1992）．大学入試システム英作文．桐原書店  
竹岡広信（2021）．ドラゴン・イングリッシュ基本英文 100．講談社

## 各委員会報告

### 言語活動委員会

本委員会は、かつて部活動委員会という名称で30年以上活動してきましたが、令和2年度より委員会の名前が現在の形に変わりました。以前は年に3つの行事を実施しておりましたが、委員不足の問題を抱えており、現在は暗誦研修会のみしか実施できておりません。運営していた研修会はいずれも生徒に直接還元されうる内容であり、今後でもできる限り存続させていきたいと考えております。活動に興味のある方、お手伝い頂ける方がいらっしやいましたら、ぜひご連絡頂ければ幸いです。

#### 令和4年度 言語活動委員会活動報告

##### 1. 第40回英語暗誦研修会

日時 令和4年11月29日（火）  
会場 水戸市国際交流センター  
目的 英語学習に効果的な暗誦活動について、その効果的な指導法を研究する。生徒の発表を通じて、その指導の成果を共有する。  
内容 生徒は英語教科書または副教材等から選んだ3分程度の英文を暗誦し、基準に基づいて評価を行う。  
講師 Tod Tollefson（茨城大学講師）  
Sophie Conn  
（茨城県営業戦略部国際渉外チーム CIR）  
栗原 純一（県南教育事務所）  
評価 発音、暗記、抑揚および流暢さ、発表全体の態度の4項目について50点満点で採点する。

結果（参加生徒14校14名）

第1位（茨城県教育長賞）

吉武綾香（竹園高等学校）

第2位

田中望花（緑岡高等学校）

第3位

椎名恋春（日立第一高等学校）

入賞者

北岡真緒（波崎高等学校）

栗原美咲（日立北高等学校）

田村紗文夏（結城第一高等学校）

#### 令和5年度 言語活動委員会活動報告

##### 1. 第41回英語暗誦研修会

日時 令和5年11月28日（火）  
会場 茨城県立青少年会館  
目的 英語学習に効果的な暗誦活動について、その効果的な指導法を研究する。生徒の発表を通じて、その指導の成果を共有する。  
内容 生徒は英語教科書または副教材等から選んだ3分程度の英文を暗誦し、基準に基づいて評価を行う。  
講師 Tod Tollefson（茨城大学講師）  
Olivia Scuplak  
（茨城県営業戦略部国際渉外チーム CIR）  
栗原 純一（県南教育事務所）  
評価 発音、暗記、抑揚および流暢さ、発表全体の態度の4項目について50点満点で採点する。

## 各委員会報告

結果（参加生徒 17 校 17 名）

第 1 位（茨城県教育長賞）

薄井向日葵（清真学園高等学校）

第 2 位

増田祐慶（牛久栄進高等学校）

第 3 位

スイコマコト（波崎高等学校）

入賞者

浅野慎治（緑岡高等学校）

羽富花音（水海道第一高等学校）

和田大地（日立北高等学校）

## 令和 6 年度 言語活動委員会活動報告

### 1. 第 4 2 回英語暗誦研修会

日時 令和 6 年 12 月 6 日（金）

会場 茨城県立青少年会館

目的 英語学習に効果的な暗誦活動について、その効果的な指導法を研究する。生徒の発表を通じて、その指導の成果を共有する。

内容 生徒は英語教科書または副教材等から選んだ 3 分程度の英文を暗誦し、基準に基づいて評価を行う。

講師 Tod Tollefson（茨城大学講師）

Olivia Scuplak

（茨城県教育庁学校教育部高校教育課 CIR）

栗原 純一（県南教育事務所）

評価 発音、暗記、抑揚および流暢さ、発表全体の態度の 4 項目について 50 点満点で採点する。

結果（参加生徒 9 校 9 名）

第 1 位（茨城県教育長賞）

高橋千紘（緑岡高等学校）

第 2 位

武井佳奈（下館第一高等学校）

第 3 位

上野瑠愛（竹園高等学校）

## ◎ 他の研修会について

（令和 4～6 年度はいずれも未実施）

（1）ティーム・ティーチング研修会

（旧生徒研修会・例年 9 月に実施）

・各参加校の実際の生徒を対象にした外国人指導助手と JTE の TT 模擬授業を実施する。

（2）英語部顧問教師研修会

・各校の英語部の活動を共有することで、より充実した活動を目指す。  
・あわせて英語部生徒の活動の発表の場とする。

※ 平成 18 年度より、上記 2 つの行事は同じ日に実施しています。

※ 委員会参加ご希望の方は、並木中等の櫻井までご連絡ください。

## 指導法委員会

平成9年度に発足いたしました当委員会も、27年目を迎えました。現在、年2回の研修会を企画・運営いたしております。研修内容をより一層充実させるためにも、委員は常に募集いたしております。興味のある方は最寄りの委員までご連絡ください。

### 令和4年度 指導法研究委員会活動報告

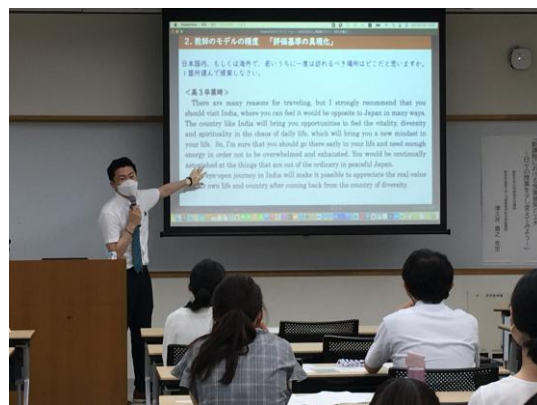
#### 1. 第1回研修会

日 時 令和4年8月10日（木）  
会 場 独立行政法人教職員支援機構  
演 題 「新課程における授業展開の工夫～日々の授業を少し変えてみよう～」  
講 師 津久井 貴之 先生（群馬大学講師）  
参加者数 25名

言語活動、教師と生徒のやり取り、評価、ルーブリックをキーワードとして、先生が実践されてきたご経験や模擬授業を通して新課程における授業のポイントをお話してくださった。

教師と生徒の英語のやり取りは授業の根幹となるものであるということで、生徒への返答の仕方として上智大学の和泉先生のフォーカス・オン・フォームを津久井先生の視点も加えて紹介してください、日ごろの生徒への返答方法を見直し、あまりしたことのない返し方を実践することで、生徒にやり取りの楽しさを伝えたいとお話いただいた。また、授業の目的、意図、意味を生徒に伝えることが大切で、言語活動を取り入れる際には、その前後の活動が重要となる、ということや、Can Doリストや目標に書かれている内容のモデルを示すことも大切であるとのことのお話もあった。モデルを示すためには、自分の生徒であればどのようなパフ

ォーマンスをするかを想定し、自分で実際にやってみることが大切である。そうすることで、課題に反映させたい既習事項や目標をどれだけ取り入れることができるかを確認することができる。さらに、生徒の英作文やパフォーマンスを見た量も指導の細かさに生かされるので重要である。評価については、先生が実際にどのようにルーブリックを作成しているかについてお話をしてくださった。パフォーマンステストでは選択肢を設けることで評価もしやすくなる。また、評価の際、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」は連動してもよいなど、参加者にとっては日ごろの観点別評価への悩みを払拭できるような内容も聞くことができた。新課程の授業と評価について、より実践的なことを学べる研修会であった。



#### 2. 第2回研修会

日 時 令和5年2月4日（土）～5日（日）  
会 場 オンデマンド  
演 題 映画 Most Likely to Succeed  
「VUCAの時代を生き抜くための21世紀型スキルとは？」

参加者数 52名

指導法初のオンデマンドの研修会には多くの先生方に申し込みいただいた。

## 各委員会報告

米国のカリフォルニア州にある High Tech High というチャータースクールに通う高校生の成長を追いかける中で、受験偏重型教育と生きる力を身につける実践的な教育のバランスをどう考えるかなどを考えさせるために作られた動画を視聴した。High Tech High は、知識をただ習得するだけでなく、他者と協働して自ら考えることを具体的な学校教育で実践している学校である。

視聴後のアンケートでは、「社会状況の変化に伴い教育にも変化が必要」だということ、「生徒が将来必要とする力（critical thinking, decision making など）をつけるような授業改善が必要」だという感想が多く見られた。

教育とは何か？教員とは何か？これからできることは、すべきことは何か？親や教育者の悩みや教育の環境の今後の変革など、多くのことを考えさせられた研修となった。

### 3. 研究協議会

令和4年

5月11日（火）第1回委員会  
（水戸第一高等学校）

7月 5日（火）第2回委員会  
（土浦第三高等学校）

8月 5日（金）第3回委員会  
（オンライン）

10月11日（火）第4回委員会  
（下館第一高等学校）

12月 6日（火）第5回委員会  
（古河中等教育学校）

令和5年

1月26日（木）第6回委員会  
（土浦第一高等学校）

3月24日（金）第7回委員会  
（オンライン）

令和5年度 指導法研究委員会活動報告

### 1. 第1回研修会

日 時 令和5年8月7日（月）  
会 場 独立行政法人教職員支援機構  
演 題 「新学習指導要領を国際基準で教える  
—CLIL に学ぶ汎用能力の育成と技能  
統合—」  
講 師 池田 真 先生  
（上智大学文学部英文学科教授）  
参加者数 25名

高等学校における英語授業に対して、CLIL の観点から池田先生にお話をいただいた。研修の流れとしては、前半に汎用能力についての概要やCLIL における授業設計・授業方法を聞き、後半のワークショップでは具体的に技能統合と汎用能力育成を目指す授業づくりを体験した。

講演の前半では、OECD が提唱するキーコンピテンシーや池田先生の研究から汎用能力とはどのようなものかを網羅的に学び、新学習指導要領で挙げられる資質・能力と比較した。また、そのような能力をCLIL で育成するために“4Cs (Content, Cognition, Communication, Culture)”や“4Ts (Text, Think, Team work, Talk )”といった概念を使いつつ授業設計をすることも学ぶことができた。また、CLIL を導入する上で具体的な注意点としてヴィゴツキーの ZPD 理論を意識したり、教材選定時に実際の書籍やドキュメンタリー等のオーセンティック教材を使うといった注意点、授業に設定できるタスクの種類（列挙する活動、比較する活動、プロジェクト型など）等も紹介された。

後半では、講演内容をもとに参加者同士で“How would you choose your heating appliances?”という授業課題とタスク、本文、単語をどう指導するか話し合ったり、私たちが実際に使用する教科書本文を題材にして実際に CLIL をどう取り入れられるか意見交換したりする時間を取っていただいた。

## 各委員会報告

講演の前半、後半を通して CLIL の理論と実践の両面について参加者が学びを深められる研修会であった。



### 2. 第2回研修会

日 時 令和6年2月5日(月)  
会 場 独立行政法人教職員支援機構  
演 題 「AI時代の英語ライティング指導」  
講 師 石井 雄隆(ゆたか)先生  
(千葉大学教育学部准教授)  
参加者数 28名

大雪で各校が午後休校などの措置をとるなか、ほぼ申し込み通り28名の参加で実施できた。

近年、教育業界は一人一台端末、電子黒板の導入、デジタル採点などデジタル機器の恩恵に与っている一方、chatGPTなどの生成AIの登場により、教育場面での活用の是非という悩ましい問題も同時に抱えるようになった。今回の研修会では、そのような悩みの突破口を切り拓くべく、千葉大学教育学部から、英語ライティング指導と評価、および英語教育における効果的なICT活用の研究をされている石井雄隆准教授をお招きし、AIを活用したライティング指導をテーマにご講演いただいた。

講演では、新学習指導要領に沿ったICTの活用方法や、DX(デジタルトランスフォーメーション)へ向かう段階的な指導、SAMR(セイマー)モデルと呼ばれる端末利用の諸段階など、圧倒的な情報量

とともに新しい英語教育の世界へと案内していただいた。

生徒に機械翻訳を禁止するのではなく、どの場面で利用すべきかを伝えることの大切さや、教員自身もICTが「手段」でなく「目的」になってしまうことの危険さなどをお話いただいた。「どのメディアを使うか」から逆算するのではなく「どのような力をつけたいか」という観点からの授業デザインが大切であるという話も大変心に残るものであった。

その他、ライティング指導に活用できるソフトやアプリケーションなどを数々ご紹介いただき、その特徴や注意点などもお話いただいた。使うことはおろか、その存在を初めて知るようなものばかりで、これからの英語教育のめざましい変化に教員自身がついて行けるのか、デジタルネイティブである生徒たちをうまく導いて行くためには教員の研鑽も必要である、と深く考えさせられた大変素晴らしい講演であった。

### 3. 研究協議会

令和5年

5月30日 第1回委員会  
(並木中等教育学校)

7月6日 第2回委員会  
(日立第一高等学校)

10月17日 第3回委員会  
(伊奈高等学校)

令和6年

1月26日 第4回委員会  
(藤代高等学校)

3月27日 第5回委員会  
(オンライン)

令和6年度 指導法研究委員会活動報告

第1回研修会

## 各委員会報告

日 時 令和6年7月29日（月）  
会 場 独立行政法人教職員支援機構  
演 題 「高校から大学につながる英語  
ライティング指導—プロセス・ラ  
イティングを中心に—」  
講 師 山下 美朋 先生  
(立命館大学教授)

参加者数23名

高等学校でのライティング授業に望むことという観点から、パラグラフ概念の定着と4つのパラグラフ・タイプの段階的指導について、ご自分の大学生へのご指導や高大連携でのご指導の経験も交えてお話をいただいた。

始めに、パラグラフ概念の定着の重要性についてお話をいただいた。大学生であっても英語でパラグラフを書く際に、日本語作文の影響を受ける傾向にあり、英文の構造化されたパラグラフ構造を認識させることが重要であるということだった。また、適切なトピックセンテンスを作成することの難しさもお話いただき、このトピックセンテンスを用いたら、次にどのようなサポーターセンテンスが続くのかを考えると良いとご指導いただいた。

次にセンテンスからパラグラフへと段階的に経ていく指導についてお話しいただいた。一文ずつの和文英訳から、接続詞、代名詞やつなぎの言葉を加えて短文をパラグラフへとしていくのがよいとのことだった。また、経験文、描写文、説明文（比較・対照）、説明文（問題・解決）といった4つのパラグラフ・タイプ別の段階的指導についてもワークショップを交えてお話をいただいた。

その後、プロセス・ライティングについてお話しいただき、指導の際には目的を伝えることやモデルを示すことが大切で、書きたい内容を箇条書きにすることも重要だとお話をいただいた。フィードバックで特に重視すべきことは、学習目標や状況に応じたフィードバック方法の取捨選択であ

るということだった。そのお話を受けて、ワークショップで実際に評価ルブリックを作成した。最後に要約指導についてもお話をいただいた。要約の基本、指導の手順、パラフレーズやサマリーの違いについて説明をしてくださった。

全体をとおして、英文は論理的に書かれており、英語の文章の構造を理解し、その構造にのっとったパラグラフ・ライティングをすることが論理的思考にもつながるということが分かった。また、ポイントを絞った評価の重要性についても認識できた。今後の生徒の指導に活かしていける要素のたくさんつまった講演だった。



## 第2回研修会

日 時 令和7年2月3日（月）  
会 場 オンライン  
演 題 「英語教員の生成 AI との上手な向き合い方」  
講 師 金丸 敏幸 先生  
(京都大学 国際高等教育院  
附属国際学術言語教育センタ  
ー 准教授)

参加者数25名

英語教員は生成 AI をどのように使ったらよいか、どのように対応したらよいかという観点からお話をいただいた。

初めに、生成 AI の仕組みと特徴についてお話しいただいた。生成 AI は次に出てくる単語を予測して出力しているもので、指示や解答例に応じて出

## 各委員会報告

(オンライン)

力する内容が変わるものである。注意すべき点としては情報の正確性や信頼性を見極める必要があり、オリジナリティの問題も可能性としてはあるとのお話だった。

次に、具体的に英語教育で生成 AI をどのように導入できるのかについて、参考になる実践例をご紹介いただきながら、お話しいただいた。これまでの指導方法を見直し、教材や課題に工夫をする必要があるとのことで、実践例として、写経式ライティング学習や読解指導教材の作成、リテリング活動や評価支援などで生成 AI を活用できることをご提示いただいた。生徒たちは生成 AI を活用することで「型」を身に付け、多様な表現を学び、自分に足りないところに気づくことができる。生成 AI を導入する際には使ってよい場面を明示する、出力の癖を見極めるなどの注意点もあるが、生成 AI を活用するために、生徒たちはますます英語の知識を必要とするようになり、読解力も必要となるとのお話だった。

生成 AI は辞書と同じであるという言葉が非常に印象的だった。今後、生成 AI を活用することで効果的な英語学習を期待できるとともに、教師が指導する場合にも生徒が学習をする場合にも、自分で考えて判断する力がこれまで以上に必要になると感じた。

### 3. 研究協議会

令和6年

5月17日（金） 第1回委員会  
（並木中等教育学校）

7月11日（木） 第2回委員会  
（オンライン）

10月 3日（木） 第3回委員会  
（水戸第一高等学校）

令和7年

1月28日（火） 第4回委員会  
（オンライン）

3月26日（水） 第5回委員会

## 英語ディベート委員会

今から15年程前には、英語ディベート活動は現在ほど周知も注目もされておらず、委員会を創設するほど英語でディベートをする高校生がいるのかと不安視されておりました。そのような中、平成26年度に茨城県高等学校教育研究会英語部内に、仮称の英語ディベート委員会を設けていただき活動をはじめ、1年間の試行期間の後、平成27年度に正式に発足しました。高教研に加盟されている先生方および生徒を対象とした研修会やワークショップの開催、および英語ディベート大会の運営を行っております。ディベートは4技能を統合的に育成することができる素晴らしい活動です。ディベートにおける論理展開の指導方法は、他の指導にも生かすことができます。

現在、11年目の活動が終わろうとしています。発足1年目にして日本ディベート協会様と「日米交歓ディベート」を共催し、発足2年目には、HEnDA(高校生英語ディベート連盟様)主催の「全国高校生英語ディベート大会(2日間開催)」の主管運営団体として、県内の延べおよそ170名の高校生とともにその大会の運営にあたりました。また、発足4年目には第1回茨城県高校生パラメンタリーディベート大会(第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会の予選会)を開催いたしました。コロナ禍においてもZOOM等を活用し、ほとんどの活動を開催することができました。最近では、年に数回行われる会議をコンパクトにしたりすることで、なるべく先生方が移動等で時間を取らないように工夫をしております。

おかげさまで委員の数が増えましたが、少人数時代同様アットホームな雰囲気です。さらに、ネイティブの先生方も参加していることが大きな特徴です。

### 令和6年度活動報告

#### (1) 生徒・教師研修会

##### ◇第1回 生徒・教師研修会

日 時：5月12日(日)

会 場：県立並木中等教育学校

参加者：生徒68人、教師13人

内 容：午前部の部では、ペアワークなどを通してディベート的活動、午後の部では今年の論題についてグループ毎にブレインストーミングをし、全体で黒板に書きだす活動をした。

##### ◇第2回 生徒・教師研修会

日 時：8月7日(火)

会 場：県立水戸第一高等学校

参加者：生徒36人、教師8人

講 師：寿楽 浩太先生

(東京電機大学工学部 教授)

内 容：今年の論題について日本語の講義を拝聴した。午後は練習試合を行うグループと見学したのちに立論を作成するグループに分かれた。

#### (2) 生徒練習会

##### ◇第1回 生徒練習会

日 時：9月15日(日)

会 場：県立竹園高等学校

参加者：生徒28人、教師10人

##### ◇第2回 生徒練習会

日 時：10月13日(月)

会 場：東洋大牛久中学校・高等学校

参加者：生徒35人、教師10人

内 容：生徒は練習試合を通して実践力を、また、県大会ジャッジは、ジャッジ研修をした。

## 各委員会報告

### (3)教員研修会

#### ◇教員研修会

日 時：1月6日(月)  
会 場：県立並木中等教育学校  
講 師：中村 隆道 先生  
(東京都立千早高等学校 教諭)  
内 容：ディベートの授業での実践や部活動  
の指導について学ぶ機会とする。

### (4)第14回茨城県ローズ杯高校生英語ディベート大会運営

日 時：10月27日(日)  
会 場：東洋大牛久中学校・高等学校  
参加校：8校  
結 果：優 勝 県立水戸第一高等学校  
準優勝 県立日立第一高等学校  
第3位 県立竹園高等学校

### (5)第7回茨城県高校生パラメンタリーディベート大会(第14回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会予選会)

日 時：1月26日(日)  
会 場：茨城県立日立第一高等学校  
参加校：9校  
結 果：優 勝 県立日立第一高等学校  
準優勝 清真学園高等学校・中学校  
第3位 茨城県立水戸第一高等学校

### (6)委員会及び研究協議会

#### ◇第1回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：5月12日(日) 15:30～  
会場：県立並木中等教育学校

#### ◇第2回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：8月7日(火) 15:30～  
会場：県立水戸第一高等学校

#### ◇第3回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：9月15日(日) 15:30～  
会場：県立竹園高等学校

#### ◇第4回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：10月13日(月) 15:30～  
会場：東洋大牛久中学校・高等学校

#### ◇第5回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：1月6日(月) 13:30～  
会場：県立並木中等教育学校

#### ◇第6回英語ディベート委員会及び研究協議会

日時：1月26日(日) 17:00～  
会場：茨城県立日立第一高等学校

### (7) 本県生徒の成績

◇第19回全国高校生英語ディベート大会 in 岡山  
(令和6年12月21日(土)・22日(日))

第17位 県立水戸第一高等学校

◇第14回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会

(令和7年3月21日(金)～23日(日))

※県大会の上位チームが出場予定

### 英語ディベート委員

委員長 廣瀬 優也  
(県立並木中等教育学校)

副委員長 パクストン・アンソニー  
(県立竹園高等学校)

会 計 深堀いずみ  
(県立藤代高等学校)

委 員 バララム・ヴィシュヌ  
(県立日立第一高等学校)

委 員 花沢 典行  
(県立水戸第一高等学校)  
(令和6年度まで)

委 員 ゴンザレス・アンドレス  
(県立水戸第一高等学校)

委 員 川島 瑠莉  
(県立結城第一高等学校)

委 員 山田 拓也  
(日立北高等学校)  
(令和6年度から)

## 各委員会報告

委 員 井上 博人  
(東洋大牛久中学校・高等学校)  
(令和6年度から)

委 員 バクラーンマーロン  
(東洋大牛久中学校・高等学校)  
(令和6年度から)

## 茨城県高等学校教育研究会英語部事業報告

### 1. 令和4年度

#### (1) 全国英語教育研究団体連合会

- 8月21日(日) ・全英連夏季全国理事会高校部会・研究協議会(オンライン)
- 11月13日(日) ・第72回全国英語教育研究大会「全英連佐賀大会」(オンライン)
- 2月5日(日) ・第15回全国高等学校英語スピーチコンテスト  
(全英連主催・オンライン)

#### (2) 関東甲信越地区英語教育研究団体連合会

- 12月10日(土) ・第15回関東甲信越地区高等学校英語スピーチコンテスト  
(山梨県主催)  
(全英連主催・関東甲信越英語教育研究団体連合会主催・山梨県立  
甲府城西高等学校)

#### (3) 茨城県高等学校教育研究会英語部

- 4月22日(金) ・第1回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 6月14日(火) ・総会並びに講演会(友部公民館大ホール)  
講演会講師 玉川大学 教授 工藤 洋路 先生  
演題 「高等学校の新課程における言語活動中心の指導  
のあり方」
- 7月7日(木) ・第2回評議員・委員長合同会議(勝田高校)
- 7月15日(金) ・第3回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 11月16日(水) ・地区別研究協議会(オンライン開催)  
講演会講師 琉球大学教育学部 准教授 深澤 真 先生  
演題 「新学習指導要領における「思考・判断・表現」の  
評価を考える」
- 10月18日(火) ・第15回茨城県高等学校英語スピーチコンテスト  
(水戸市国際交流センター)
- 8月26日(金) ・第4回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 9月20日(火) ・第5回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 12月21日(火) ・第6回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 3月27日(月) ・第7回評議員・委員長合同会議(オンライン)

### 2. 令和5年度

#### (1) 全国英語教育研究団体連合会

## 茨城県高等学校教育研究会英語部事業報告

- 7月23日(日) ・全英連夏季全国理事会高校部会・研究協議会(オンライン)
- 11月24日(金)～25日(土)
- ・第73回全国英語教育研究大会「全英連愛媛大会」  
松山市民会館(24日)、愛媛大学(25日)
- 2月11日(日) ・第16回全国高等学校英語スピーチコンテスト  
(全英連主催・国立オリンピック記念青少年総合センター)
- (2) 関東甲信越地区英語教育研究団体連合会
- 8月16日(水)～17日(木)
- ・第22回関東地区高等学校英語教育協議会「神奈川大会」  
(オンライン)
- 12月9日(土) ・第16回関東甲信越地区高等学校英語スピーチコンテスト  
(新潟県主管)  
(全英連・関東甲信越英語教育研究団体連合会主催・新潟県立新潟  
高等学校)
- (3) 茨城県高等学校教育研究会英語部
- 4月21日(金) ・第1回評議員・委員長合同会議(オンライン)
- 6月13日(火) ・総会並びに実践発表(友部公民館)
- 7月3日(月) ・第2回評議員・委員長合同会議(石岡第一高校)
- 10月5日(木) ・第3回評議員・委員長合同会議(石岡第一高校)
- 10月17日(火) ・第16回茨城県高等学校英語スピーチコンテスト  
(水戸市国際交流センター)
- 11月29日(水) ・地区別研究協議会(県北地区・多賀高校)
- 3月28日(木) ・第4回評議員・委員長合同会議(石岡第一高校)

## 3. 令和6年度

- (1) 全国英語教育研究団体連合会
- 8月11日(日) ・全英連夏季全国理事会高校部会・研究協議会(オンライン)
- 11月15日(金)～11月16日(土)
- ・第74回全国英語教育研究大会「全英連埼玉大会」(獨協大学)
- 2月5日(日) ・第17回全国高等学校英語スピーチコンテスト(全英連主催)
- (2) 関東甲信越地区英語教育研究団体連合会
- 12月7日(土) ・第17回関東甲信越地区高等学校英語スピーチコンテスト  
(群馬県)  
(全英連・関東甲信越英語教育研究団体連合会主催・共愛学園前橋)

国際大学)

(3) 茨城県高等学校教育研究会英語部

- 4月23日(火) ・第1回評議員・委員長合同会議
- 6月11日(火) ・総会並びに講演会(友部公民館)  
講演会講師 千葉大学教育学部 准教授 石井 雄隆 先生  
演題 「英語教師のための効果的なICT活用」
- 7月 8日(月) ・第2回評議員・委員長合同会議(太田一高)
- 8月21日(水) ・プレゼンテーションフォーラム・高等学校の部  
(茨城県教育委員会・高等学校教育研究会英語部共催・つくば国際会議場)
- 10月 2日(水) ・第3回評議員・委員長合同会議(太田一高)
- 10月18日(金) ・第17回茨城県高等学校英語スピーチコンテスト  
(水戸市国際交流センター)
- 10月30日(水) ・地区別研究協議会(県東地区担当・IT未来・笠間合同開催)
- 3月26日(水) ・第4回評議員・委員長合同会議(オンライン)

## 編 集 後 記

多くのご尽力を得まして、「研究紀要第30集」をお届けすることができました。各記録からは、日々向き合う生徒たちの英語力を向上させたいという先生方の熱意が伝わってきます。執筆の労にあたられた会員の皆様および関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

次回第31集は2027年3月発行の予定です。幅広い分野からの研究や実践記録をお寄せいただき、より一層紀要の充実を図っていきたいと考えております。今後ともご協力をお願いいたします。

末筆になりましたが、皆様のますますのご活躍とご健康を心よりお願い申し上げます。

2025年3月

編集委員一同

## 研 究 紀 要 第30集

---

2025年3月31日発行

編集・発行 : 茨城県高等学校教育研究会英語部

代表 谷津 勉

編集事務局 : 〒313-0005 茨城県常陸太田市栄町58番地 TEL: 0294-72-2115

編集委員 : 宮本 修平 (並木中等) 佐藤 駿介 (多賀) 関根 貴則 (IT未来)

---